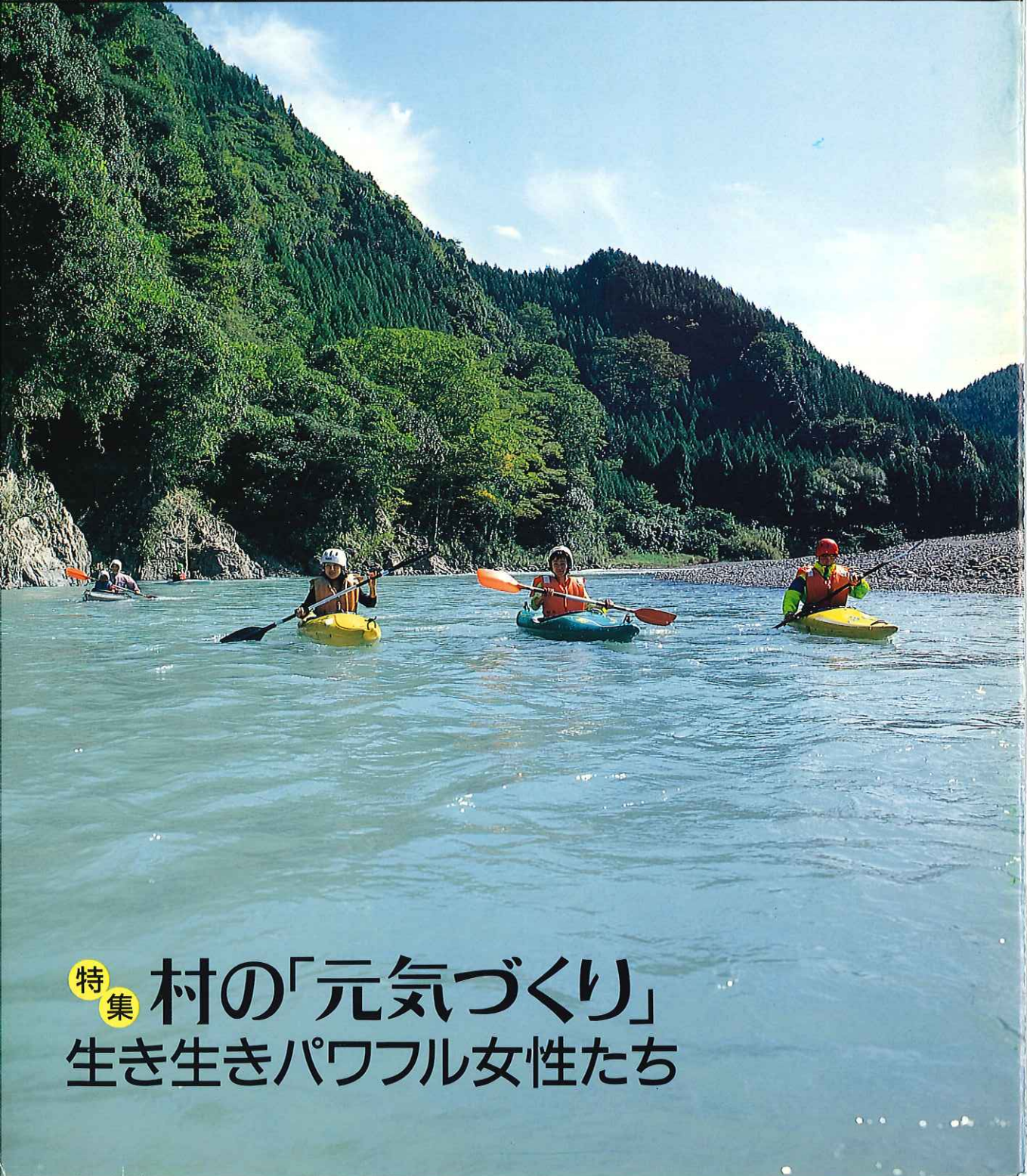


[De POLA] 地方と都市を結ぶホットライン・マガジン

# でぽら

NO. **4**  
'93春夏号



特集 村の「元気づくり」  
生き生きパワフル女性たち



## 特集 村の「元気づくり」 生き生きパワフル女性たち

各地の町村で女性たちが活躍している。女性ならではの知恵や体験、ねばり強さを生かし、大地の暖かさ、命の大切さ、仲間の素晴らしさを知っている女性たち。こんな女性たちのいる村は元気で夢も大きい。

1. 農家のお母さんパワーを結集して。  
女性だけの第三セクター快走中——10
2. 島で「自分」と自然、生活の原点をみつけた。  
青ヶ島にやってきた保母さん達——13



3. お母さんたちの知恵と行動力が冴える。秘境「杣の里」はグルメの里——17
4. 「おいしい風、ゆたかな時間」を求めて。農場で働く女性たち——21
5. 地域で高齢者を支えあって福祉活動専門員——25

わたしたち「元気いっぱい、やる気いっぱい」

【地域づくり】のリーダーたち

- ひとむきなオジさんと元気な女性たちと  
「じゃっ隊」事務局長隅田節子——4
- 私の「ふるさと作り」  
「ふるさと青年協力隊」橋本千香——5
- NARAづくりの小さな主役たちのサロン  
「まほろば未来塾」山口恵美——6
- 「健康まつり」には保健婦手づくりの人形劇で  
西川町保健婦佐藤せい子——7

### エッセイ

過疎地のデカップリングは自治体の知恵でできる／安達生恒——28

カシオペア座公演



DePOLA INFORMATION  
人気のユニークな施設——34

### 都市からふるさとへのメッセージ

- 小さな町村にナマの音楽を  
モービル・ライブ・サウンズ——30
- 「その先の日本へ」  
JR東日本のポスターづくり——32

### 海外の田舎ぐらし拝見

ユトランドの緑の風に吹かれて  
デンマーク ベストゴーさん一家——37



●表紙／静岡県春野町 赤石山脈から流れ出た清流、気田川でカヌーを楽しむ若者、親子たち。春野町はお茶と果実の美しい里である。(写真・小林恵)

「ではら」(DePOLA)とはDepopulated Local Authorities (人口が少ない地域)、つまり過疎地域の意味。わが国の過疎市町村は37%にも達しています。貴重な自然環境と農産物の供給地であり、日本の伝統文化や風土を伝承してきた農山村の活性化と発展をめざすための交流誌として『ではら』をお届けいたします。



「ふるさと青年協力隊」  
で活躍の橋本千香さん  
(右から2人目)



「まほろば未来塾」リーダー山口恵美さん

地域づくりは「人づくり」  
なんていうけれど、ただ人  
を集めて立派なことを言っ  
てもダメ(ごめんなさい)  
諸先輩たち。私達は人が好  
き、動くのが好き。好奇心  
と夢をふくらませて、ルン  
ルン楽しんでいる。  
そんな4人の活動ぶりと声  
をちょっと聞いてみてー。

わたしたち  
元気いっぱい、やる気いっぱい  
軽くしなやかなフットワークで。  
【地域づくり】のリーダーたち



山形県西川町保健指導係長佐藤せい  
子さん



「じゃっ隊」事務局長  
隅田節子さん



# ひたむきなオジサンと 元気な女性たちと

## 隅田節子

■球磨・人吉むらおこし連絡協議会  
「じゃっ隊」事務局長

「地域づくり」のようなものに携って3年目。私のまわりでさまざまな出会いがネットワークという形になりつつある。ぞくぞくするほどの楽しさを感じている毎日である。

### オジサンばかりの 「じゃっ隊」じゃダメ

「球磨・人吉むらおこし連絡協議会「じゃっ隊」とは、球磨郡市の地域づくり活動家たちがお互いに情報交換し、励まし合おうというネットワークで、17のグループと17個人が参加している。平成2年に発足して以来、試行錯誤を重ねてきたが、現在は月に一度の交流会開催、情報誌「じゃっ隊かわらばん」の発行などを行っている。

ところが、その現状はオジサンばかり。女性や若者の参加、その機会づくりがじゃっ隊の課題であった。

そんな時、いま農村で最大の課題とされている嫁対策に関連して、じゃっ隊有志でイベントを打つことになった。



「ふれ愛パーティー」(下も)

嫁対策→主役は若者↓若者が楽しい↓若者がたくさん↓女の子の子の憧れ結婚式・ドレス……

連想ゲームの末、決定したのが模擬披露宴「ふれ愛パーティー」の開催である。

さて当日、会場には100人の男女が集まった。くじで決めた新郎新婦がドレスとタキシードで入場すると、もうパーティーは披露宴そのままの盛り上がり。友人ス



ピーチからキャンドルサービスまで、なりきって遊んでしまう。コンピュータによるねるとんゲームでは、18組のカップルが誕生した。このパーティーでは、多くの女性たちが媒酌令夫人役、受付などを「おもしろそうね」と快く引き受けてくれた。また、「次は自分たちの手で開催してみたい。じゃっ隊に入りたい」という若者の声も出てきた。

そして今、オジサンの結論は「楽しくかことばやりよったら、好きな者が集まってくる。とにかく、おもしろかことばしよい」になっている。

### 女のおしゃべり ネットワーク

各地で地域づくり交流会に参加するたび、なぜ女性が少ないのだろうかという疑問を感じてきた。自分の感覚を語り合う場や相手が欲しい。何人かの女性たちに想いをぶつけたところ、「なら、自分たちで「場」を作ろうか」との答えが返

ってきた。  
というわけで、今年3月人吉市で「第3回九州女性サミット」もひとよしパーティーを開催することになった。第一回長崎県、第2回大分県でそれぞれの有志がそれぞれのコンセプトのもとに開催してきた同サミットであるが、第3回の目的はズバリ「友達づくり」である。

男VS女なんて肩凝る話はナシ。いい男といい女しか参加できないの、思いっきりおしゃべりする会やろうよ！目を輝かせた、たくさんの女性たちが集まってきた。

実行委員は、人吉市を中心に熊本県各地の女性たち15人。主婦、自営業、公務員etc。イベントなんて初めての人が大部分である。現在準備中だが、協力依頼、ゲスト出演依頼などを通じて、県内外のいろんな人々と出会うことで、友人の和が広がりつつある。みんなが「出合い」を楽しんでいるのが、サミットのなによりのエネルギ源だ。

また、私たちの周囲の男性たち(夫、友人)が積極的の手を貸してくれようとしているのも本当にうれしい。

来年3月に向けてサミットはますます多くの人を取り込んで、おしゃべりネットワークは九州へ広がっていくことだろう。

### 「想いを共有しあえる 2つのネットワーク

オジサン含有率極めて高しの「既存地域づくりネットワーク」と、自分を語りたい女性たち中心のネットワーク。前者はなんとか女性会員・若者をと集り、後者は「地域づくり」なんて興味ないわと一蹴しがちである。

2つのネットワークの狭間にたつて、いま、無理にくつつける必要もないと思っている。人柄やエネルギーに引張られて「地域づくり」を手伝う女性がいる。

元気な女性がいる。「もっと語り合いたい」という気持ちに、男性が役に立ちたいと思う。

ステキに輝いていればいっしょに動きたいものが集まってくる。男も女も関係ない。年齢も関係ない。さまざまな違いを認めあいながら、何らかの「想い」を共有できるかどうかが大切ではないか。

それぞれのネットワークをしなやかに行き来しながら、肩の力を抜いたところで自分の想いを話していきたい。そして、真の私のネットワークができていくのだから。

(すみだ・せつこさん/九州大学卒後昭和63年4月熊本県庁入庁、平成2年4月球磨事務所総務振興課勤務)



# 私の「ふるさと作り」 「ふるさと青年協力隊」に参加して 橋本千香



## 農村で自然と「ふるさと」の豊かさを学んだ

みなさん「ふるさと」と呼べる町を持っていますか。

私は、生後数カ月から転居を繰り返して「ふるさと」を意識することなく育ちました。そんな私がなぜ今「ふるさと」にこだわった毎日を過ごしているのか、わずか二年半前の小さなきっかけを、いまさらながら不思議に思わずにはいられません。

そのきっかけは、私が勤務する大学の掲示板に貼られていた一枚のポスターです。

兵庫県には過疎と過密の両方を

抱える特性があります。そこで都市部の青年が農山村の人々と交流し、労働体験などを通じて、都市と農村のかけはしとなることを願って平成二年の夏に「ふるさと青年協力隊」という事業が始められました。

募集ポスターに書かれていた「こころのふるさと」という言葉にひかれて、私は軽い気持ちで第一回の「ふるさと青年協力隊」に応募したのです。

派遣先は兵庫県の中央部、朝来郡朝来町。過疎化とともに高齢化問題を抱える人口7000人の町です。5泊6日、39人の仲間と地元の人々と一緒に河川の葦刈りをしたり、子ども会活動に参加したりしました。

都会育ちの私がこの事業に参加して学んだことは、ひとつは農山村部の豊かな自然のすばらしさです。炎天下の作業では汗びっしょりになりましたが、その上空間の豊かさには心が安らぎました。そしてもうひとつは「ふるさと」

を大切にすること、心の豊かさです。暑い最中に私たちと一緒に作業をしてくださった地元の人々は、自分の住む町をとっても大切にしておられました。

私はとても幸運だったのです。私は軽い気持ちで「ふるさと青年協力隊」に応募しましたが、この事業は兵庫県独自の新しい試みとして各方面から注目されており、全日程が終了した後にテレビやシンポジウムなどで私に事業の報告をする機会が与えられました。

初めて農山村部での生活を経験し、多くの驚きと感動がありました。普通ならばそれらは都市部での生活に戻り、時間が経つにつれて単なる思い出と化し、薄れてしまったでしょう。しかしこのように改めて考える機会が与えられたことによって、私は自分なりの考えをまとめることができたのです。

農村ではとくに女性が裏方ばかりに回らされている気がしたので、あるシンポジウムで「町おこしに女性の力をもっと有効に使わなくては」と発言しました。すると会場のご婦人から「ではあなたは地域のために何をしているのですか」と逆に問われたのです。

私は「こころのふるさと」という言葉にひかれて朝来町へ行きました。そして、そこで私は「ふるさとを愛するこころ」を学び、自

分の足元に広がる世界に気づきました。「ふるさと」とは与えられるものではなく、その土地を愛することによって自分で作り上げていくものだと思いついたのです。このご婦人の言葉から私の「ふるさと作り」が始まりました。

## 「こころ豊かな人づくり」 五〇〇人委員」として

翌年の春、県の人材育成事業の「こころ豊かな人づくり五〇〇人委員」の一員に加えていただき、月に一度、地域の方々と一緒に勉強をさせていただき、同じ地域に住む幅広い年齢層の人々と知り合うことができました。またその年の秋には「県民交流の船」にスタッフとして加えていただき560人の方々と一緒に中国を訪問しました。この船に参加させていただいたことによって「ふるさと」の

ために働いている大勢の同世代の人々と知り合うことができました。最初はほんの小さなきっかけでした。しかしそれがどんどん広がり深まっています。これは決して一人の力ではなく、大勢のまわりの人々のおかげです。「ふるさと」に目を向けなくなっている若い人たちもきっかけさえあれば、仲間たちと何かを作り上げていく喜びを知ることができれば積極的に「ふるさと」のために働くのではないのでしょうか。

私の「ふるさと作り」は始まったばかり。仲間たちと力を合わせて素敵な「ふるさと作り」を続けていきたいと思っています。

(はしもと・ちかさん/昭和62年神戸女学院大学卒、同大学勤務、平成4年兵庫県庁より「若人の賞」受賞)



朝来町で子供たちと遊ぶ

## 第Ⅰ期「まほろば未来塾」修了式



## “まほろば”の地から NARAづくりの “小さな主役たち”のサロン

■奈良県総務部地方課「まほろば未来塾」スタッフ  
山口恵美



### いま、なぜ「人材」なのか？

人材格差が企業格差！ バブルがはじけた現在こそ、この言葉が実感される今日この頃である。生存競争に負けてしまった企業は淘汰されるという現実。片や、我々公務員の世界はどうか。地域は活性化しなくても(？)役所はつぶれない。よく言われることである。

しかし、もうじつとしてはいられない。組織自体は変貌の可能性を孕んでいるのだ。

パイロット自治体構想がうやむやになっても、地方拠点都市構想が示されても、やはり一番強くかつ凜としてなくてはならないのが基本的細胞である「市町村」である。もう結果は始めている。

人材格差が地域格差となる以上、

いまだ情報発信せず、わが村・わが町の素晴らしい人間にスポットをあてずにいる〇〇村、△△町、みんなチャンスなんだと思えるから楽しいじゃないか！

### 「まほろば未来塾」発進

平成2年9月、忘れもしない台風接近の日奈良県まほろば未来塾は、そのスタートの日を迎えた。地域づくりのリーダーとなりうる人間たちを集めて、もっと刺激を与え、互いの情報を掛け算方式で増やしていける人間たちの交流と研さんの場とするのが、そのコン

セプトである。

年齢制限なし、職業制限なしという公募。その狙いどおりの人間が集まったのだから、企画運営をする私のような立場の人間は嬉しいやら、緊張するやら。平成4年12月現在は第Ⅱ期目の仲間と共に奈良県各地をポヘミアンしながらゼミナールとコミュニケーションに励み、かつ自分自身の活動の知恵の源泉とすべくお互いを利用し尽くしている！

Ⅰ期の修了と同時にOB会も誕生した。会長は黒田さんという女性。事務局長は伊藤さんという、これまた女性。共に50代の元気印ウーマン。いやはや彼女たちのパ

ワーには頭が下がる。しかし彼女たちの活動は楽しそうで、なおかつ「しなやか」なのだ。

黒田氏は、その活動の一つに奈良の古い町並み(通称・奈良町)の保存活動をやっておられるが「私は奈良町に恋しているの」とのたまう。一方伊藤氏は、ご自身がリサイクル技術の先生をやり、日本海側の友好都市の婦人グループとの交流の世話までやってしまう。「動ける間はじつとしていてはだめ」、なのだそうである。

### 「ごだわる」センス ——オンナの感性

未来塾にはすてきな男性諸氏が



富山県利賀村「世界そば博」でスタッフと。右が山口さん。



# 「健康まつり」には保健婦 手づくりの人形劇で

■山形県 西川町・保健指導係長

佐藤せい子

## 「健康まつり」は 地区のメイン行事

西川町では昭和54年から「健康まつり」を実施しています。町内12地区ごとに開催し、子供からお年寄りまでみんなが参加する地域のメイン行事として大にぎわいます。

健康の大切さ、検診への参加、

いる。でも女性は少数派だが元気いっぱい、やる気いっぱい。彼女たちを見て思うことは、動きが軽やかだ。そして組織の弱点は切り捨てることにためらいがない。自分に枠をはめない。これだと思ったら、まず走り出してから考えようとする。フットワークが軽い。また好きな「こと・もの・人」には徹底的にこだわってしまふ。そのこだわり方が気負ってはいない。

たった一度きりの人生の楽しみ方を悟っている、とても言いげなこだわりをもっているから楽しい。楽しいから地域のためにやる

活動自体も長続きするのでは？

持論ではあるが、こだわりの持たない人間に魅力はない。酒の飲み方・遊びの方法でさえ例外ではない。こだわりの才能である。それで失敗したっていいじゃないか。努力する。そしてその努力を無駄にできる人間、そんな人間とたくさん知り合いたい。

## 私的未來塾論

未來塾を始めてまだ2年4カ月。その間に県外の同士の訪問を3度もお受けした。千葉県館山市「地域リーダー育成塾」、岡山県津山市「入づくり委員会」、岐阜県河

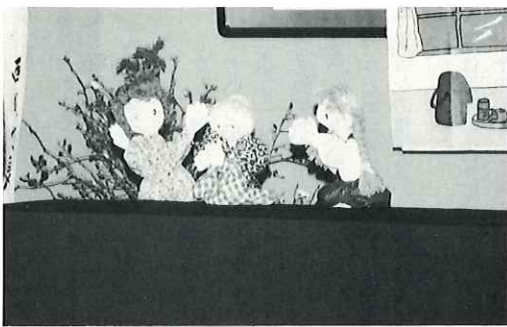
合村「夢らんと塾」、すてきな人間と興味深い会話とおいしい酒に酔った時間であった。

今、全国で地域おこし塾がブームのようだ。それもいい。手を替え品を替え、色々やるっていいんじゃないか。そんな中、わが未來塾はサロンにしたいと考える。異端を入れて活性化させるというサロンにしたいのだ。だから裏方である私は、塾生のいい女・いい男を挑発し続けるのが仕事であると心得ている。

（やまぐち・えみさん/昭和58年大阪市立大学法学部卒、奈良県庁地方課入庁。「まほろば未來塾」開設以来、女性リーダーとして活躍中）

普通の講義では面白くないので、約30分のドラマ仕立てにし

「あしたも元気で」人形劇



みんな健康体操

形劇で上演するんです。例えば、方言たっぷり「いででて……ああエツガイ。こだえ腰えったくて寝でらんに入」とおばあさんのセリフではじまると、観客も笑い出して、私たちの素人芝居に興味を持ってつき合ってくれます。

台本作りや人形作り、それに練習も大抵夜で、各地区の「健康まつり」の世話人の人たちの都合でも休日や平日の夜になります。10月〜翌年3月頃（農繁期が終った10月〜翌年3月頃）になると夜も昼も大忙しです。まつりの日が地区で重なることもあるため、セリフはテープに入れておいて、次の会場へとクルマをとばします。

塩分や糖分の摂りすぎに注意するという食生活の指導では、塩分0.8%のみそ汁という場合150ccに1.9gの塩分が含まれているということを実際に塩や砂糖を並べて示すんです。「なるほど」とよくわかってくれて好評です。

理学療養士の指導で健康体操をやったり、お年寄りに給食サービスをしたり、地区によってプロگرامが違いますが、どの地区も世話人や指導員の方が大変熱心で中学生や先生も全員参加するところもあります。当初健康まつりをやるうという時、私たちがまず手がけたのが、各地区へ出かけてリーダーになってくれる人を探すことと、住民の要望や地域の特性を生かしてきめ細かい健康教育をしていくことでした。いまでは、「自分たちの健康は自分で、地域で」という考え方が文字通り定着してきていると思います。

## 高齢者を 町と住民が支える

高齢化率は23.1%（平成4年4月）と、山形県内でもトップで、町内には独り暮らし老人が71名、高齢者世帯が170戸ありますが、ホームヘルパーの巡回や保健婦の指導の他に、何かあれば地域の人が面倒みあい連絡をとり合うようになっていきますのでお年寄りにとっても住みよい町ではないかと思



手づくりの人形を持って西川町保健婦さんたち(右から2人目が佐藤さん)

います。  
 その上、役場の隣りという町の中心部に老人保健福祉施設「ケアハイツ西川」が平成2年にオープンしました。特別養護老人ホーム、デイサービスセンター、さらに病院と在宅介護の中間施設としてリハビリ等を行う老人福祉施設を併設した複合施設です。一面には保健センターも開設されますので、私たちもそちらに移り、地域と一

体となった保健医療、福祉を一層すすめていきたいと思っ  
**子供は父親 母親の責任で**  
 西川町は磐梯朝日国立公園の朝日連峰や月山などの景観美あふれた山岳を持つ町ですが、町面積の95%が山地。歴史のある景勝地という点もあって企業等の誘致も

少なく、冬は豪雪と厳しい寒さに見舞われるため、人口の流出が続き、昭和30年に1万5000人だった人口は現在8500人になって  
 います。  
 しかし、健康への取り組みは全国でもいち早く、西川町が発足(昭和29年)して間もなく地域に母子推進員や食生活改善推進員、衛生委員などを設置し、また、昭和36年から宮城県対がん協会に頼んで胃がんの集団検診を開始して  
 います。

私は西川町の保健婦になって37年。その前はある国立病院で看護婦をしていましたが、生れ育った町での地域保健の仕事に魅力を感じ転職しました。  
 臨床看護のように瞬間的な厳しさはありませんが、その町、その地域、その家庭、その人のニーズに合った健康づくりの仕事には「これでいい」という終りが無く、くり返しくり返し啓発していく仕事です。

30年代は母子保健の華やかな時代で、町の母子保健センターでほとんどの赤ちゃんが出産し大忙しでしたが、いつの間にか若者が次々と出ていき出生児が減っています。昨年はここ数年の中で最も多く86名生まれましたが、ずっとこの町で育つてくれれば嬉しいのですが……。  
 生活や意識の変化には大きいも

生活や意識の変化には大きいも



老人保健福祉施設「ケアハイツ西川」

のがあります。とくに最近感じることは、働くお母さんが多くなつたせいか、子供の世話をあばあちゃん達がしていること。動きまわる子供は目が離せませんから、孫の世話で倒れてしまうというお年寄りもいます。  
 やはり子供はできるだけ母親と父親が自分たちの手で育てるのが原則です。今の若い人は割合甘やかされて育っていますので、結婚して子供を生んではじめて親の苦労や命の大切さを知るケースが多いんです。子育ては大人へのステップであり地域の人達との交流の場にもなります。  
 間もなく定年になりますが、これからはボランティア活動に力を入れ、高齢社会を支える一員になりたいと思っています。

## 女性リーダーの起用は?

「女性の社会参画」といわれるが我が国でよく例に出されるのは女性の政界への進出の少なさ。世界で女性が大統領・首相に就任している国は6カ国あるのに、大臣どころか我が国の衆議員の女性議員の割合は14%で、先進国地域33カ国中の最下位である。

これは地方の場合も同様。一昨年芦屋市で女性市長が誕生したり東京、沖縄、石川、新潟等で女性の副知事が誕生して話題になったが、議員数の割合は都市より低い。「東京女性白書92」によると、都の各種審議会における女性の割合は14・8%(平成3年)と国の9%を上回っているものの、伸び率は低減傾向。マスコミを騒がせた「マドンナ旋風」もブームに終わってしまったさらいがある。

### 地方こそ女性パワーを活力に

一方で、行政面での女性起用は年々多くなっており、「女性専断課」で話題を呼んだのは、鳥根県安道町の町民生活課。戸籍、住民登録、国保等の窓口サービスを8人の女性が、気配りを生かした対応が好評。神奈川県横須賀市の女性行政課、徳島県那賀川町の住民福祉課なども係長以下すべて女性スタッフだが、民間の女性進出に比べるとまだまだ始まったばかりだ。



●特集／現地ルポ

# 村の「元気づくり」

# 生き生きパワフル女性たち

各地の町村で女性たちが活躍している。若者不足や人手不足を補うための労働力としてではなく、女性ならではの知恵や体験、ねばり強さを活かした活動。いま風のカッコよく饒舌な女性たちとは無縁だが、自分の信念を持ち大地の暖かさ、命の大切さ、仲間の素晴らしさを知っている。こんな女性たちのいる村は元気で、明日への夢も大きい。





# 農家のお母さん。パワーを結集して 女性だけの第三セクター快走中

岐阜県明宝村

## 観光ルート 「せせらぎ街道」

本州のほぼ真ん中に位置する岐阜県。その岐阜県の、これまた真ん中に開けた村が明宝村だ。

役場の農林課、酒井係長は数日前の電話でとにかく女性たちが頑張っている村なのだと力説した。一体どんな女性たちが、どんな仕事をしているのだろう。

その明宝村を訪ねたのは暮れもおし迫った師走のいち日。南北アルプス、木曾の山々の頂きを真っ白に染めた山容に圧倒されながら、山国ニッポンを実感しつつ本州の真ん中、明宝村へと向かった。

長良川沿いの郡上八幡から、さらに支流の吉田川に沿ってクルマで北上すること20分。明宝村はアマゴが釣れるこというきれいな清流の吉田川を挟んで、その両側に開けていた。山間の斜面にやわらかな冬陽を受けて、のんびりとした風情で集落が点在している。

人口2、300人足らずというこの

村は、吉田川に沿って伸びる村の主要道路「せせらぎ街道」の整備によって、

ここ数年かつてない活気を呈してきたという。県内有数の観光地である飛騨高山、郡上八幡を結ぶこの道路は今では観光道路として欠かせないものとなった。

村が第三セクターで経営する大規模ドライブイン「磨墨の里」は、この「せせらぎ街道」の整備によって序々に利用客数を増やし、さらには村内初のスキー場オープン、温泉掘削の成功が村民たちに大きな自信をもたせることになった。

そうした一連の動きの中で村の活性化の原動力ともなってきたのが、この明宝村の風土にしっかりと根をはった女性ばかりの会社「明宝レディース」だ。会社としての設立は平成4年7月とまだ日は浅いが、会社としてスタートするまでに農業婦人クラブという長年の実績と基盤があった。村のドライブイン「磨墨の里」の物



「どうも」と言っ差し出された名刺には「株式会社明宝レディース取締役社長 細川和子」と、何ともいかめしい肩書き。顔をあげればスニーカーにエプロン姿の、笑顔が可愛い女性が立っている。しかし、「明宝レディース」はれっきとした株式会社。岐阜県の明宝村が第三セクターで設立した、女性ばかりの会社なのだ。奥美濃の山々に囲まれた小さな村で、今いちばん頑張っている女性たちの、夢がいっぱいの拠点を訪ねた。(写真右/まんじゅう作りをするメンバーたち。左端が細川社長)

# 村の「元気づくり」

生き生きパワフル女性たち——1

「今日は工場長の鷺見政枝さんと青空まあが」と明るい声があつてきた。「今日が工場長の鷺見政枝さんと青空まあが」と明るい声があつてきた。「今日が工場長の鷺見政枝さんと青空まあが」と明るい声があつてきた。

「せせらぎ街道」から脇道へ入り、緩やかな斜面を登っていくと、小さく拓けた台地に「名宝レディース」の作業場兼事務所、そして倉庫の建物が見えてきた。入口の近くでは、正月用のものだろうか、つきたての餅が小さく丸められ並べられて白い作業服の女性が忙しそうに出入りしている。近づく中からは弾むような笑い声。そんな中から一人の女性が出てきて名刺を差し出された。「株式会社明宝レディース 代表取締役社長 細川和子」。人なつこい笑顔のその女性はこの会社の社長さんだったのだ。

作業場では4、5人の女性たちが全員白い作業服で働いている。「ご苦労さまあが」と明るい声があつてきた。「今日が工場長の鷺見政枝さんと青空まあが」と明るい声があつてきた。

「27名というのは、村の3つの婦人グループがひとつになった人数なんです。そもそも婦人クラブというのは家の合間に農家の主婦が集まって、生活や環境の改善を話し合ったり、編物や料理の講習会を開いたりするグループだったんです。その中で、出荷できないような形の悪いトマトや、摘花メロンなどを使って、ケチャップや漬物を作っていたんですが、そんなことが現在の仕事に結びついたんですね。

ドライブイン「磨墨の里」物産館で売られる明宝レディースの漬物が評判。



「農業婦人の店」を開店。平成3年にはもう加工施設の導入などが実施された。こうして「明宝レディース」設立までには、一歩また一歩と着実に積み重ねられてきた歴史があった。それだけに社長はじめ社員一人ひとりの「会社」への思いには、一方ならぬものがあることだろう。

平成元年には村の協力により農産物加工所を建設、さらにスキー場の開設にもなって「めいほうスキー場」に「農業婦人の店」を開店。平成3年にはもう加工施設の導入などが実施された。こうして「明宝レディース」設立までには、一歩また一歩と着実に積み重ねられてきた歴史があった。それだけに社長はじめ社員一人ひとりの「会社」への思いには、一方ならぬものがあることだろう。

## 社員は27名 全員が女性

早速、役場の農林課酒井係長の案内で「明宝レディース」の拠点へと向かった。

この「明宝レディース」は明宝村が第三セクターで設立した第五番目の会社だという。村ではこれまでにハム加工会社、スキー場、ドライブイン、温泉と、4つの第三セクターを設立。「明宝レディース」が揃って、ますます充実した展開へと期待がこめられている。社員は27名で全員が女性。もともと地域の婦人クラブが母体となっていることもあって女性ばかりの会社となった。

この3つの農業婦人グループは、古いものでは昭和30年結成のグループもあり、特にここ10年間の活動にめざましいものがある。自家消費のみだった漬物やケチャップづくりは、昭和56年の青空市場の開設に伴ってさらに試作がくり返され、商品化するアイテムも



無農薬・無添加物の漬物が並ぶ

## 料理を作らん農家が ふえたから

現在「明宝レディース」が扱っているのはトマトケチャップ、ソース類の他、飛騨紅かぶ漬、摘花メロンの酒粕漬、ナス漬、みょうが漬、梅漬、野沢菜漬などの漬物類、きやらぶき、ワサビの葉漬などの惣菜類、コンニャク、もちの加工などと幅広い。これらは主としてドライブイン「磨墨の里」の物産館や青空市場で販売される。他にもスキー場や村の温泉でも人気があり、好成績をあげているという。

「昔はねエ、こんなものはみんな自分の家で作ったただけねエ」と誰かが口を切るとみんなが大きく頷いて口々に話し出した。

「今じゃ、家庭の中で嫁さんと姑さんがいっしょに料理を作ることもないから、その家の味なんて伝わりようもないんだわ」

「なますなんて、今じゃ誰も作らないものねエ。昔は野休みがくると、必ずニシンと昆布を煮たりしたけどねエ」  
「この明宝レディースで伝統の郷土料理を覚えていく、なんていうお嫁さんも随分いるからねエ」

「貴重な存在になっちゃったねエ、この会社も」

作業場の奥の事務所兼居間のような部屋で、コタツを囲んでいっとき楽し



作業場。ここで青空市場も開かれる。

いお喋りの花が咲いた。お茶受けに出されたのは「明宝レディース」ご自慢の摘花メロンの粕漬と飛騨紅かぶ漬、ナス漬、きやらぶきなど。

この味が素晴しかった。添加物を一切使っていないため、素材そのものの味が活かされ塩分もグッと少な目です。いつい箸が進む。

「この辺りはもともと畜産が盛んでいい堆肥が豊富なんです。だから土がとってもいいの。もちろん化学肥料なんて全く使わない有機栽培だからね、カブでもナスでもトマトでも自慢でき

るものばかりですよ」と細川社長が胸を張る。

青空市場で販売を担当している和田幸子さんが「何しろ土づくりから関わって、素材から加工まで全部自分たちでやりますから、お客さんに何を聞かれても自信をもって答えられるんですよ」と、誇らしげに笑う。

この誇りこそ「明宝レディース」を支えている原動力であり、この土地や風土を愛する彼女たちの変わらぬ姿勢

であることだろう。家族に迷惑をかけた時間内で無理なく働けるから、と誰もが言う。夫や家族の理解があつてこそその勤めだと、感謝の気持も忘れな

い。  
農家の嫁という受身の消極的なイメージから、自分たちにできる可能性をどんどん試していける場を与えられた彼女たちは、いまこの村で一番輝やいている女性たちといえるだろう。

(金山淑子)

## 《めいほう高原 特産セット》を 全国各地へ送料込み3,500円で郵送します。



よもぎの風味たっぷりの草餅



明宝ハム1本 トマトケチャップ  
1本 紅かぶ漬1袋 メロン漬1  
袋 梅干又は南蛮漬煮1個

・美麗化粧箱入り、ふるさとメッセ  
ージを添えてお送りします。

・お申し込み先 〒5011143

岐阜県上郡明宝村寒水1188

Te118057587V2388

Fax18057587V2703



# 島で「自分」と自然、生活の 原点を見つけた。

青ヶ島(東京都)にやってきた保母さん達

八丈島から連絡船「還任丸」にゆられて二時間半、ようやく緑の島が見えはじめた。斜面を横切る一本の道路以外に、人の住む気配を感じさせない断崖絶壁の孤島。八丈島から約67・7 kmの海上、伊豆諸島最南端に位置する青ヶ島は、総面積5・98 km<sup>2</sup>、総人口202名の全国最小自治体である。

青ヶ島は富士火山帯に属する複式

火山島。内輪山丸山(223m)を含むカルデラ内では、今でもあちこちから熱気が噴き出している。噴火による島民の離島、あるいは幾多の海難史を乗り越え、村制が施行されたのは昭和15年。近年ヘリコプターによる旅客輸送も軌道にのり、いよいよ来年からは毎日運行される予定とはいえ、島の自然は深く厳しい。

今回は島外から働きにやって来た保母さんにスポットをあて、人々を惹きつける島の魅力、現実の問題などについて考えてみたい。



島の中は亜熱帯の植物が群生している。



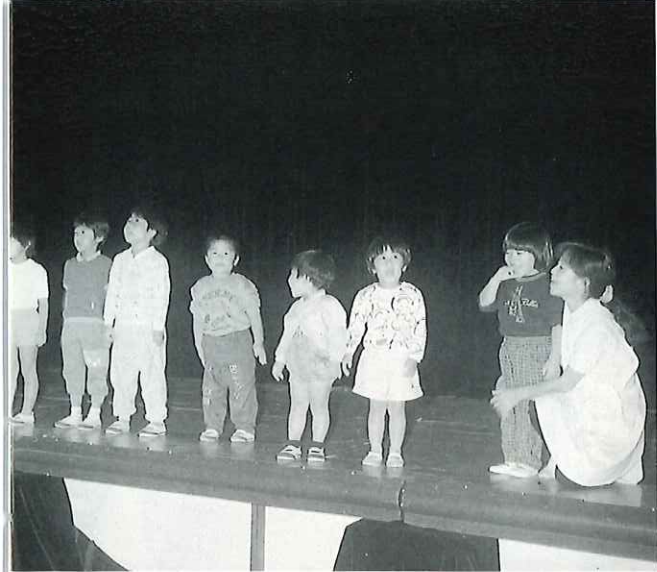
断崖絶壁の青ヶ島

東京都  
八丈島  
青ヶ島

## 「子供の気持ち」を大切に

村の演芸会を十日後にひかえ、保育所はその準備に大忙しである。午前中、近くの体育館のステージで出し物のダンス、歌、そして劇の練習が行われた。走り回ったり、突然泣き出したり、万国共通の子供らしさでとにかく元気いっばいだ。現在保育所に通う子供たちは二歳から五歳までの12名。みんなが一緒に行動するせい、五歳児ともなると年長さんの風格たっぷりて立派に下の子の面倒を見ている。

練習が終わると子供たちは走りよっ



てきて、「おねえちゃんも見に来てね」と口々に叫んだ。影踏み遊びに興じたり、死にかけていた鼠を葉っぱの布団で介抱したり、子供たちの周囲には元気な声が続かない。

### ●子供を連れて逆単身赴任



小岩ひとみさん

「子供たちがそれぞれ、自分を外に出せるっていうのは大事だと思います。よいことにしろ、悪いことにしろ」

そう言うのは小岩ひとみさん(33歳)。「子供の気持ちをいちばんに考えたい」という小岩さんは、以前からカリキュラムからはなれて子供の意志を尊重し、のびのびした保育をという保育園に勤めていた。だが、昨今では、就学前の幼児に対する英才教育を勧める世間の事情も手伝って、子供らしさが一番発揮される時期に、それを逆に押さえつけてしまうカリキュラムぎっしりの幼稚園も少なくないそうだ。

「たとえば近所をちよっと散歩するにしても、綿密な指導計画が要るんです

よ。そして歩くときには子供たち一本のロープを握らせる。これ変だよと思っても口に出せない。それが体制っていうものなんですよ」

東京都の発行する広報を読み、青ヶ島のことを知った。保母として働くために国家試験を受けて資格をとり平成3年4月に島にやってきた。夫は東京に置き去り(？)、小学校三年生の子供を連れての逆単身赴任である。最初は島になじめなかった息子が、今では東京に戻るたび「島に帰ろう、帰ろう」と言う。

少人数の保育ができること、本物の自然があること。そういった環境で子供と触れ合うことで、小岩さん自身の自分らしさも見つけられると思った。

「お弁当持って子供たちと島を散歩します。ずいぶんあちこち歩き回ったから、たぶん島の人より道を知ってるんじゃないかなあ」

もちろん島の父兄側から、平仮名を教えずにいいのか、絵を描かせたり粘土工作をさせたりしないのか、という「指導」型保育を望む意見もてる。

小岩さん自身その必要性を否定するわけではない。子供の自主性に焦点をおき、そこにある限りない可能性を汲み出すこと。ベテランでありながら、そうした疑問を自らに問いかける小岩さんは、笑顔もとても素敵だった。



藤野ひろみさん

### ●島へきて明るくなった

「初めて船に乗ってやってきたとき、びっくりしましたねえ。こんなに断崖絶壁だとは思わなかった」

藤野ひろみさん(30歳)は新聞の求人広告を見て、青ヶ島にやって来た。千葉、横浜などいくつかの保育園での保母経験をもつ。

「性格？ すごく内気だったんです。人見知りするほうだったし」

今の藤野さんを見るかぎり、昔の本人をイメージすることはできない。「いちばん面白いの、ひろみ先生だよ」とそっと教えてくれた子供の言い分はおそらく正しい。一緒にいるだけで元気になれる、そんな人物である。一方、その底抜けの陽気の裏側に、感受性豊かな優しさを時折垣間見せてくれる。「英才教育っていうんですか。子供に何かを教えずにちやっという意識が先にたつて、全部がお稽古ごとみみたいになっっているんですよ。しっかりカリキュラムされて、なおかつ詰め込み方式以前働いていたところに較べて、ここ

## 村の「元気づくり」

生き生きパワフル女性たち——2

● 僻地で働くのが望みだった  
最年少の保母さんは、鈴木なつきさん（22歳）。立川の保育園で一年勤めたあ



鈴木なつきさん

の子供たちは幸せだと思います。都会のごみごみしたところもないし」ダンスを一緒に踊ったり、ステージの子供たちに混じって劇を練習したりしている藤野さんは本当に生き生きしていた。前述した小岩さんの言葉「自分らしさ」を素直に表現しているといった様子だ。都会で抑制されていた自分のなかの何かが、島の自然と子供たちによって解放された。弱さや痛みを理解できる人だから、逆に人に対して明るく振る舞うことの大切さを知っている。

藤野さんの屈託のない明るさの裏には、人を優しく包む暖かみがある。島の子供たちはそういったものを無意識のうちに彼女から感じとり、英才教育からだけでは得られない多くのものを学んで成長するのだろうか。

と、昨年4月から島にやってきた。以前から僻地で働きたいという希望をもっていた。「保母さん二年目ということもあって、仕事の面での辛さ、大変さは東京でも島でも同じです。でも保育は環境次第、大人次第だなあとつくづく実感しました。言葉でなく」インタビュアーに応じる時の鈴木さんは、言葉少なでまだあどけなさを感じさせる。都会が懐かしくないかとの質問には、「子供といえる時は感じないです。でも休みの日になると、ふうっと気の抜けた場所があると、たぶん、まだ時間の使い方をよく知らないのかな、仕事以外に自分のしたいことって何だろう、とか考えることもありまし

「外に用事で出て帰ってくる時、船から島が見えてくるでしょ。その時に、

ああ待ってる子供たちがいるんだなあと思うと気力が湧いてくる」東京の友人になつきちゃん前より子供になったねと言われる。泣いたり笑ったり感情をストレートに表に出すようになったからだ。ある意味でそれは都会では失われつつある人間らしさを取り戻しているということなのかもしれない。演芸会の練習では、進行役、音響歌のピアノ伴奏など、舞台の前を駆け回って大活躍の鈴木さん。子供たちといえる時の彼女は逞しくのびやかで、ああこれが彼女の自然体なのだという印象を与えてくれた。

### 島で二年でも二年でも暮らしてみること

青ヶ島の産業について触れておこう。昔から島の女性の仕事であった焼酎づくり（通称青酎）、これはサトイモと並んで、島内で生産される甘藷を原材料としている。昭和60年度から導入されたパッションフルーツの栽培は、平成2年約12トンを出荷、前年と比較すれば二倍の伸びをみせている。また関東では唯一の高級黒和牛の出荷地として、畜産振興事業はこれからますます発展するだろう。だが多くの過疎地域の例に洩れず、青ヶ島も若者の離村問題を抱えている。高校がないこともあり、島の子供

### 高級黒和牛の飼育は大切な島の産業



たちは中学卒業を機に島を離れる。島の老人は言った。

「若い人が帰ってきてても仕事がないからね。パッションフルーツの栽培にせよ牛を飼うにせよ、子供の頃から手伝っていたり、特別好きだったりしないとなかなか出来ないものだ。今は道路工事が盛んだから、若い人はそっちをやるね。日雇い労働だけど給料は高いし、金はすぐ手に入る」

一方で、島の外から若い世代がやって来る風潮もある。保母さん3人だけではない。青ヶ島で働こうと島の外からやってくる人は多い。役場で働く30人のうち島内出身者は僅か2名（村長を含む）、駐在、郵便局職員など、行政

4日ぶりに八丈島から船がきて  
港は大賑わい活気に満ちた。

にかかわる仕事の多くに島外の人々が携わっている。行政サイドが数年のサイクルで入れ代わる外部の人間によって運営されることで、島の抱える本質的な問題は解決できるのか。外からやって来た人々と、島民との間に多少の食い違いがあることは否定できないが、これは単純に答えられる問題ではない。

役場の職員を例にとれば、ひとりていくつもの係を担当する忙しさだ。村の将来について考えるには、より多く



の責任と覚悟、そして持久力が必要とされる。

「正直、明日はどうか分らない。とりあえず一日一日を頑張るぞ、という感じなんです。無責任というのではなく、それが今は精一杯なんです」

「村の人のために何かしようなんて押しつけがましい気がする。そんなことしないでずっとやってきたんだから」

それぞれの言い分には説得力がある。言葉で説得するのではなく、島で暮らしているという事実があまりにも大きいからだ。村おこしという名目で立派な器は出来たけれど人材はまだというのに較べ、島に生きる人々は一人一人がとても生き生きとしている。彼らはひどく純度の高い何かを持っているし、そこには形式や制度の先行しがちな嘘もない。島での生活を実際に始めることで、彼らは「自分」を発見あるいは「自然」を知る。そこから得るものは大きい。

「彼らを通じて青ヶ島ファンが増えるというだけでいいんです。一年なり二



青ヶ島の魅力を語る菅田助役

年なり青ヶ島に住んで、その人の人生に何かをもたらすことができれば」

助役の菅田正昭さんはそう言う。本人も島に魅せられたひとり、通算五年、単身赴任で来て二年二カ月が過ぎた。

### 自給自足の術が生きる

民宿のおばさんは「三日来るつもりなら十日覚悟しないと駄目じゃあ」と言った。冗談にとって笑っていたら、大雨、それに続く強風で船が三日間欠航した。村に二軒ある食料品店の品物は当然のことながら減るばかりである。島で出会った老人の「ここはアメリカより遠いんだよ」という言葉にも納得してしまう。だが、水を雨水に依存している島にとっては、雨の恵みは大切だ。食料にしても同じこと、牛や鶏を飼い、野菜を栽培し、長い歴史のなかで人々は自給自足の術を身につけている。

「還住丸がようやく八丈島からやって来た日、港は大賑わいだ。釣りをする島の人、港湾工事に携わる人、食料を積んだコンテナを運ぶ人、役場の人、島の訪れる人去っていく人、訳もわからず胸がどきどきした。そしてこれが活気というものかもしれない、ふと思った。遠く離れていく青ヶ島を見ながら、「還住」という言葉のもつ深みを改めて思い知り、島に生きる全て



強風で海は大荒れ、船は3日間欠航した。



晴れると埠頭は釣り人で賑わう。

のものにエールを送りたい気持ちになった。

(文・浅井四葉 カメラ・満田美樹)





お母さんたちの知恵と行動力が冴える  
 秘境「そま 杣の里」はグルメの里  
 福岡県矢部村

どこでも取れる野菜や山菜、川魚を使って見事な懐石料理にしてみました。農家の片すみに忘れられていた食品に光を当てて栄養満点のおやつを作っているお母さんたちがいる。

今年、過疎地域活性化優良事例団体として国土庁長官賞を受賞した福岡県矢部村に、名料理人たちを訪ねてみた。



◆ミセスあるべんの皆さんと懐石料理



「杣の里」はフランス料理のコース付で1泊1万円。



「杣の里」ライトアップしたソマリアンハウス



無農薬・無添加の漬物等の他に餅をついて売る白鳥会の人達。



農業に燃えている農協若妻会の女性たち。若々しく魅力いっぱい。



「柚の里」の立食パーティでもミセスあるべんの郷土料理は人気。

## 1万人が来村して「矢部まつり」は大にぎわい

矢部村は福岡県の東端にあり、山を越えて熊本県、大分県に接している。織物やお茶で有名な久留米市や八女市からクルマで約30分、矢部川の源流にある人口21455人の村。

訪れた日は11月最後の祝・休日、村は最大行事「矢部まつり」でにぎわっていた。高速八女インターを降りたところに「矢部まつり」の看板が出ていて、村に着くまでの国道沿いには同じような看板が沢山あった。

その心意気ときめ細かいサービスぶりに感心しながら村に到着、早速会場になっている村民体育館へ行った。

体育館下が多目的広場になっており、そばには矢部川がゆったり流れている。広場も河原周辺も駐車場も、人、人。そしてこの秋収穫した農産物やお母さん達手作りの漬物などがあふれるばかりにおかれ、都市では考えられないような安い値段で売られている。

もつとびっくり、感激は、村中のお母さんや娘たち、お年寄りも総出て出店している「食べもの」コーナー。

商工会婦人部は、矢部の山菜を使った五目おにぎりとアワ入りおにぎりを200円で。森林組合婦人部は手打ちの日本そばを、農協婦人部若妻会はサトイモ入りの草もち、田楽などを。さらに食生活改善を長年手がけてきた「白鳥会」は、無添加、無農薬の漬物類や味噌などの他に、会場でお餅をつき草もちを作って販売。

すみの方では、恥かし気におじいさん達が、杉を焼いて作ったという懐しい下駄やサンダルを売っている。河原沿いではヤマメ釣り大会が開かれ、釣り上げた魚を炭火で焼くにおいが芳しい。皆んなが参加して盛り上げている。

そんなわけで我々は本来の取材の目的を忘れて、次々と試食して歩き、農産物等を買って込んでしまった。

翌日も会場へ行き、またまた買い込み、二つの段ボール箱を宅配便に託したのであるが、いまま思いついてみても、もつと買ったかった、もつと食べてくればよかったと悔やまれる。それほど「矢部まつり」は魅力にあふれていた。忙しい時間の中で心よく話に感じてくれた女性たち、ポンと気前よく安く売ってくれたお父さんたち、売り子の声も板について野菜売りを手伝っている子供たち、あの活気に満ちた顔も忘れないだろう。「来年もまた必ず会いに行きたい」と思ったものである。

2日間の来村者は1万人を超える



「矢部まつり」の会場で語る若杉村長

## 村民みんなが参加して活気ある村に

祭りの会場で超多忙の若杉繁喜村長にお話を伺った。

「矢部まつりは昭和60年からはじめましたが年々盛んになっています。必要な金は村も出すが、実行するのは村民で、一戸当たり3000円出してもらっています。自分たちの祭りだという意識を持ってもらうというのが当初の目的でしたが、ご覧のように村民100%が協力してくれ、イベントやコーナーづくりも自分たちの手というようになりました。祭りの参加者1万人のうち85%は村外の人ですから、交流事業としても大きな成果があります。

矢部村は「柚の里」として「柚の里」

や「柚人の家」などを作って宿泊や研修、交流の場を設けていますが、運営や料理づくりに主婦や住人たちがプロ以上腕前を發揮し、大変好評を得ています。村民みんなが何らかのかたちで参加しているということが大切で、それが日常的にも生かされるようになつたと思つています。

さらに、「結の森」、お年寄りにも住みよい村というのが願いです。いまは過渡期ですが、確実に少しずつ田舎志向が増えていきます。子供にはいい学校へさえ出せばいいという親たちも健康が第一だというように考えはじめました。ふるさとのよさが見直されて、矢部村を訪れる人が少しづつ増え、若い人も村に残ろうという意識が高まっています。村の持つ資源を生かしながら矢部らしい活気ある村を作っていくというのが私の希望です」と村長は語っていた。

また、矢部村農協の組合長平田直亮さんは、

「ここはどこよりも水がおいしくて、お茶も山菜も野菜も何もかもとれます。祭りをみて、売っている農産物や加工食品の多さに驚いたでしょう。みんな手づくりで、主婦たちの知恵を結集したものです。祭りの主催は、村と農協、森林組合、商工会が協力してやっています、それぞれが競い合っているの、内容的にも年々充実してい

ます。田舎のよさがもう一度見直される時代になつたと思つています」  
平田組合長の案内で、農協婦人部若妻会の人々取材させてもらった。

### 夫婦で農業に燃えています

農協若妻会のメンバーは現在20名。矢部まつりの会場の中では、一段と華やき元気のある女性たちのグループだ。どの家も農業を主体にやつていて、しいたけ栽培、八女茶製造、イチゴハウスなどを手がけている。感想を聞くと、「主婦で農業に燃えています」と一斉に答がかえつてきた。

代表の高山涼子さんは「ここはとても楽しい。みんな子供もいるし、おじいちゃんやおばあちゃんもいるけれど、月一回は集つて会を開いています。ミニバレー、お花、お茶、だべり会などいろいろやって楽しんでいます。矢部が気に入って町の方から嫁いできたお嫁さんも結構いますよ。私たちもステキに生きていますが、お父ちゃん達も魅力的ですから」と語る。

手のあいた人がお茶売場やたき出しの裏方へとまわり、よく気がきく。なかにはもう高校生の子供を持つ母親もいるそうだが、みんな若くて美しい。

生活改善グループ白鳥会のメンバーは12名。



「柚人の家」の懐石料理を食べにきたハチオ市のグループ

婦人活動の中枢となつてきた人達で、8年前から無添加、無農薬、有機栽培を手がけ、自分たちの手で食物の研究開発を行つてきた。ラッキョウ、梅干し、たくあん、山菜漬、かにみそ、柚子、こしょうなど。これらは「柚の里」の売店でも土産品として売られ人氣がある。

この祭りの日のために、ここ四、五日は夜半まで準備を行つたというが、石うすで餅をつく動作も手なれたもの。まさに大地に根をはるお母さんたち、すごいパワーを感じる。

祭りの会場で、野菜のたっぷり入った玉子焼きをくばっていたのは食生活

改善推進協議会の女性たち。各地区に一名以上、現在30人が役員をしており、月一回会合を開いている。食生活改善のための講習会や検診など保健活動のお手伝い、独り暮らし老人の世話などをしてる。

会場で配つた玉子焼きは、貧血を防ぐためのレバー入りオムレツだった。家庭で簡単に作れる献立表なども配布し、健食づくりを呼びかけていた。

### 「柚人の家」で懐石料理に舌づつみ

翌日はかねてより注目の「柚人の家」へ出かけ、ミセスあるべん味の会の女性たちが作る懐石料理を味わつた。

「柚人の家」は中間地区にあり、村内でも古い民家の多い静かな山間だが、130年前の安政5年に建てられたという民家を改修したもの。一尺一寸の大黒柱、三尺三寸の二段重ねの梁などが時を越え光り輝いている貴重な家。広々とした和室に座り、庭先きの完熟した柿の実や紅葉をながめながら、しばし先人たちの気分を味つていると、注文の懐石料理が運ばれてきた。

人氣の公卿さん懐石(3500円)は、地鶏のさしみ、焼物、やまめの塩焼、山菜天ぷら、茶碗むし、山芋たたき、こんにやくのきんぴら、香の物、小鉢三品に、きび飯と萬両そば、デザートのコース。季節によつて内容は変



けやき染めと織物教室 (クラフトセンター)

いしかったといわれ、再び来てくださいますと、嬉しくなります。

もともと料理が好きな人たちです。何度も勉強や試作をしながら、もつと工夫をしていこうと努力しています。身近かある野菜でも工夫次第でこんなにおいしくなるということがわかってもらえればと思います。」

時給は約600円で、小遣い程度にしかならないが、気の合った仲間と責任ある仕事をやれることに満足していると語る。

近くに住むお年寄り夫婦が散歩にやってくる。「うちの嫁もメンバーの一人です、よく頑張っていますよ。この地区がとて賑わい出し、栗原小巻さんなども何回かやってきて、すごくおもしろい」と喜んでくれたそうです」と話していた。

### ソマリアンハウスでは フランス料理と陶芸、染色

常時活動しているメンバーは7人で、3〜4人づつが交替で勤務している。普通は昼食のみ、予約制で受けており、準備のために朝7時にやってきて、家の掃除からはじめるのだという。昨日は矢部まつりにも手伝いにつき、夜は柚の里のソマリアンハウスでのレストランでも「柚人の家」料理を提供するなど、ミセスあるべんたちは大忙し。

代表の栗原美千代さんは、「かなり忙しくてここしばらくは家のことができない状態でした。でも家族からほげまされ、お客さまからお

宿泊した柚の里ソマリアンハウスは、さらに奥まった山間にあり、釈迦ヶ岳(1230m)、御前岳(1209m)から流れ出た水が美しい渓谷を作っている。宿泊・研修施設ソマリアンハウス、レストラン、けやき染めや御前窯をするクラフトセンター、バンガロー、溪流釣り場など自然を生かしたレジャー施設があり、矢部村観光の目玉でもある。

このレストランでは何とフランス料理が夕食のコースにセットされている。コック長は東京の一流ホテルで腕をみがいてきた江田さんで、Uターンした。地元でとれたものを中心に、さらに周辺から新鮮な材料をとりよせて、本格的なフランス料理を味わわせてくれる。

「田舎にフランス料理があってもいいでしょう。今まで村内では、お客さんがきたとき連れていったり家族でちょっとおいしいものを食べたい時に行ける店がなかったのです。カルチャーの意味も含めてフランス料理店にしたいんです」役員企画課の人から説明があった。

ソマリアンハウスには、一泊して釈迦ヶ岳へ登山する「体験ツアー」に参加する団体が50名ほど泊っていて、その夜は立食形式となった。中央のテーブルにいっぱい並べられたフランス料理の数々を目を輝かせて見入る子供たち、「こういうの生まれてはじめてじゃね、おはし使っていていいかしら」というお年寄りたち。宿泊者たちみんなが一堂に会してお喋りしながら舌つづみするのもグッドアイデアといえそうだ。

宿ではロビー等で夜おそくまで話が続いた。毎年家族大勢でやってくる福岡市の生協グループのリーダーは、「全国各地を旅したけれど、矢部村が一番です。観光地としてみればまだまだ整備がはかまわれているけれど私たちは

それを求めているわけではありません。人間的にみな素晴らしく、自分たちの生活や自然を守りながら村おこしをしている。だからこの村へくるとホッとできるんです。」

彼らの案内で北海道からアイヌの会長のたちもやってきて「私たちの築いてきた伝統や風土が矢部にはある」といって感動し、翌日丸木にアイヌ伝承の木彫を作ってくれたという。その木彫りは、ソマリアンハウス前の広場に置かれ、周辺には晩秋の野菊が咲きほこっていた。

●矢部村・(財)柚の里 ☎0943(47)3000。柚人の家 ☎0943(47)2173 役場 ☎0943(47)3111  
●なおアンナショップ「SOMAR IAN」が福岡市内天神1-13-20に開設されており、柚の里のレストラン「ル・クレソン」ご自慢のカレーが味わえる他、特産品販売、矢部村施設の子約案内を行っている。(浅井登美子)



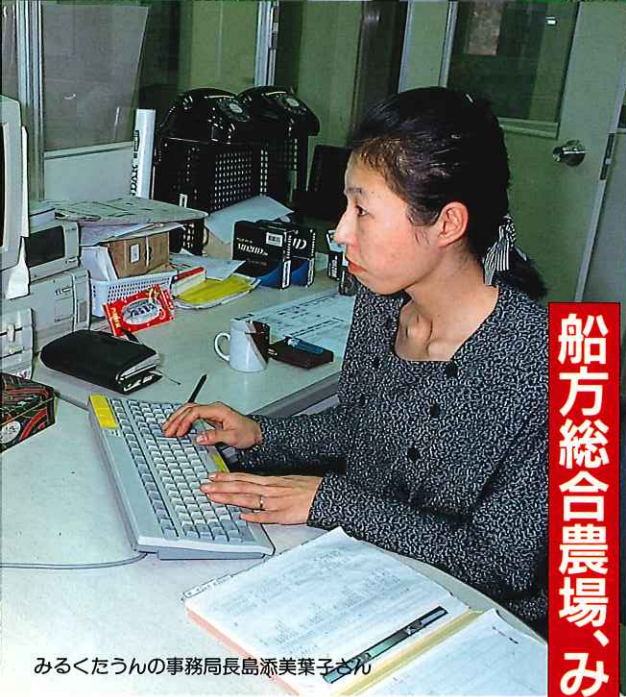
溪谷に吊けられた九州一長いつり橋



乳製品、肉製品の加工に従事する岩木由美子さん



エイミーさん（防府市のアテナショップで）



みるくたうんの事務局長島添美葉子さん



牛舎の飼育係若松恵美さん



「おいしい風、ゆたかな時間」を求めて  
農場で働く女性たち

船方総合農場、みるくたうん（山口県阿東町）

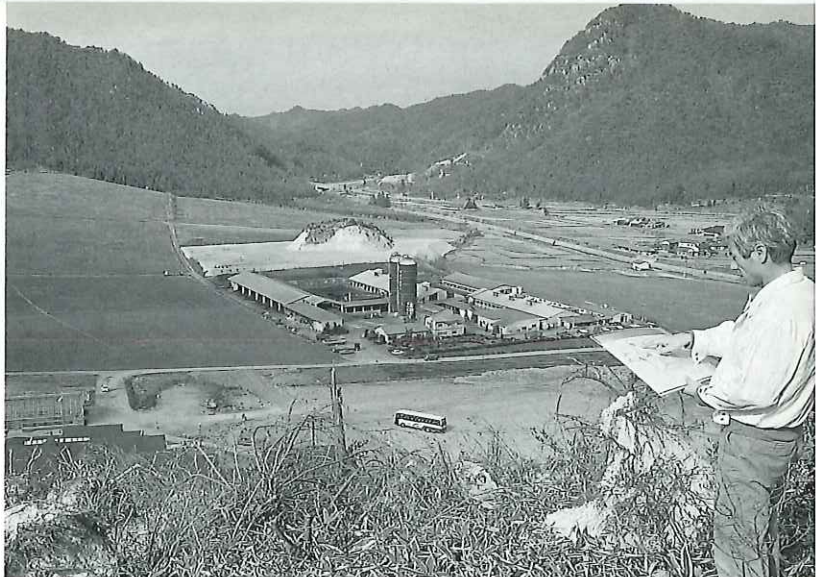
「町から出ていった仲間がUターンして農業で食えるようにしよう」「日曜日は休んで夢でも語ろうや」――25年前、一人の若者が仲間呼びかけて小さな農場をおこした。

その農場は、いまでは牛を250頭飼い、園芸や米作りもやる(船方総合農場として注目をあつめ、また乳製品等の加工・販売部門として)みるくたうんを設立

し、消費者とのネットワークにも力を入れている。

新しい農業経営を実施し、夢を語る坂本多目場長に魅せられてUターンしてきた若者や都市から農場へ働きにきた女性たちで、船方総合農場は活気に満ちている。

女性の何人かを取材して、この農場の魅力と働くことの意味を探ってみた。



船方総合農場

船方総合農場(山口県阿東町)は中国地方のほぼ真ん中にあり、山口線の沿線。なだらかな山々を背景に広々とした牧草地帯が広がり、まず牛舎群が目につく。入口に近い棟はマンモス堆肥舎。よく発酵しおいしそうな色とおいを放つ堆肥を見て見学者はまず驚く。

なだらかな丘を登っていくと「みるくたうん」の建物。ガラス戸越しに、ハム、ソーセージ、ハンバーグ等の加工の様子がよく見え、売店ではしぼり

たての牛乳、チーズ、ヨーグルトなども販売している。どこでもキビキビ働く女性たちの姿が印象的だ。

現在男女合わせて50人働いていて、何か行事のある時は地域のお母さんたちも手伝いにくる。

### 消費者と生産者の橋渡し役 島添美葉子さん

(例みるくたうんの事務局で働き、販売企画から、手作りの月刊誌「HOT / みるく」の制作まで手がけているのが島添美葉子さん(29歳)、肩書きは「みるく探偵局長」。

山口県防府市に生まれ、大学は京都工芸繊維大学工芸学科染色工学科へ。

学生時代に海綿活性剤の研究で琵琶湖に調査に行きあまりの水質汚染に驚き、その後、家庭用洗剤に疑問を感じて調べていくうちに、日用品として市販されているものの中に安全性に問題のあるものがあることを知った。

卒業後防府市に戻り、市役所の消費モニター等をはじめたが、その最初の取材が船方総合農場だった。

坂本場長の生き方にひかれて、「みるくたうん開発準備室」の消費者代表として参加、それが縁で勤めるようになった。

ご主人の島添哲也さん(30歳)と知り合って結婚、一児の母だが、ご主人は歯科技工士の仕事を辞め、同農場の新



月刊誌「HOT / みるく」を制作する島添さん

しい組織である「みどりの風共同組合」の事務局長をしている。

住いは防府市。二人でマイカーで通勤してくるが、帰りは育児中の美葉子さんは5時に退社する。

「防府という都市から船方のある田舎への通勤は、リゾートオフィスに通う気分でなかなか快適ですよ」という。

「私は安全でおいしいものを作って、それを消費者に提供していくための橋渡し役です。いまは、もっと消費者に農業の大切さ、素晴しさを理解してもらいたいと思っています。」

最近あちこちで村おこし、町おこしが盛んですが、村おこしは人材だけではだめで経済です。この先生に残れる最大の要因として数字を大切にしないかといと……と美葉子さんは語る。

3台のコンピュータを使って計数管理をし、どちらかというと夢の多い坂本場長の女房役にまわることも。設備

費や運営の諸経費が膨大な上に50人に月給を払っていくことは並大抵ではない。

給料は都市に比べたらとても安いですが、皆んなの労働の中から生まれた貴重な報酬だと思っている。

一消費者の立場で参加した美葉子さんだが、いまでは「みるくたうん」の経営や21世紀への計画づくりになくてならない存在だ。

### 「ここには探していた「日本」があった—— エイミー・ウイルソンさん

「みるくたうん」の人気者エイミー・ウイルソン(26歳)さんは、農場でプログラマーとして働いたあと、いまは情報宣伝部長として活躍中。昨年防府市に「みるくたうん」のアンテナショップが開設されたのを機に消費者との交流や営業活動に取り組んでいる。最近近は市町村の文化講座に講師として招かれることも多い。

1966年ニューヨーク州マンハッタンに生まれ、ペンシルバニア大学で電気工学と東洋学を専攻した。電気工学は生活のため、東洋学は仏教に興味を持ち、東洋と西洋の文化の違いを学ぶため。

文部省のJ・E・Tプログラムの英語指導助手として来日して二年間で日本語も上手になった。折をみて京都、広

講師としても活躍のエイミーさん



島、山口等へ旅行をしたが、東京や京都はニューヨークと同じような都市で好きになれない。山口へきて、小郡から萩へ向かう車窓からみた田園風景に感動した。

「明るくて緑の美しい田舎の風景。麦わら帽子をかぶって農作業をしている人を見た時、ここに日本文化があると感じました」

東京の貿易会社に勤めるつもりだったエイミーさんは山口市に住む決意をした。その頃坂本農場長と知り合い、「日本のビジネスを勉強したい」と話したところ、「私のところへこないか」と誘われた。

「初めて農場を訪ねた時、堆肥の臭いに懐きを感じました。もう一人面白い女性（島添さんのこと）が入ってくる

ので、二人でみるくたんうんを作ったりと社長に言われて。自分の求めているものが探せると思いました」

営業活動の他にコンピュータもやるし、パッケージのデザインも手がける。住いは山口市内にアパートをかりて通勤。

「山口はのんびりと自分の生活ができます。船方総合農場にはアメリカ社会のような自由さがあり、その上、大学で学んだコンピュータも生かせるし、日本語や日本文化も勉強できて、すべてを満足させてくれます」とエイミーさんは語る。

しかし彼女にも悩みはある。今年の8月でビザが切れる上に、結婚問題も身近なものになってきた。国際結婚して日本に住もうかな、と思うこの頃である。

日本のきれいなところは、と聞くと、「お世辞とうわさ話が好き。イエス、ノーがはつきりせず、その中間の灰色の部分が多いです。それが日本文化の一つの特色かもしれないけれど、私が日本へきて感じることは、せつかく2000年の古い歴史や文化がありながら、外国文化の流入ばかりに目がいき、大切なものを失っているように思えます。また、地方にはこんなにも素晴らしい生活があるのに若い人が都市ばかりへ目がいくのもよくわかりません」と語っていた。

「安全でおいしい食品」づくりの現場をもっと消費者に  
岩木由美子さん

「力仕事から加工まで、何をやらせても安心してまかせられる働き者」と同僚たちがほめる岩木由美子さん(32歳)は、牛の飼育から加工、販売まで現場を最も知っている女性の一人である。

牛舎で牛の世話をして一年ほど経った頃、「グリーンヒルA.T.O」の設立の話があり、バーベキューハウスの設立や「みるくたんうん」で乳製品、肉製品の加工に参加した。

「グリーンヒルA.T.O」とは船方総合農場の地域交流事業として昭和60年に設立したもので、子供たちに自然や生き物(うさぎ、羊)とふれあえる場として「わんぱく農場」を設けたり、農場の所有する森に休憩場やバーベキューハウスを作って解放していこうというもの。

事実、ここへやってきた子供たちは広い農場内を思い切り駆けまわったり、うさぎを抱いたりして大喜びし、親たちは入場料や乗物代の必要もなく安全な場所なので、のんびり昼寝を楽しんでいる。

岩木さんにも3人の子供がいる。同農場の牛舎で働く一郎さん(34歳)と知り合って結婚した。

「いまは子供がいるためパート勤務で

森に設置されたバーベキューハウス



ですが、子供は主人の母が面倒を見てくれるため、パートといっても朝9時から夕方5時半まで勤務しています。田舎のよさで鍵っ子にすることもなし、子供たちは外で自由に遊んでいます」と由美子さんは言う。

由美子さんは島根県の実業家に生まれたが子供の頃から農業に興味を持ち、高校は益田農林高校、大学は中国四国酪農大(岡山県)へ行った。高校の実習の時、牛の出産に立ち会い、その時の感動が忘れられなかったという。一年間研修を受けたあと船方総合農場を訪ね、牛の世話をすると約束して入社した。

「牛の生産第一次産業、乳および肉の加工(第二次産業)、製品販売(第三



次産業」と一貫したシステムの中で働いてきていますので、良い製品を作るために、いかに労力と努力が必要かがよくわかります。安全な食品を生むことがどんなにか大変なことか、消費者の方々にこの牧場へきて見学、体験してほしいと思います」

残念なのは、「みるくたうん」の加工設備や技術は完備しているのに、製品の売り上げはいま一步。売れる環境づくりに苦心している。

「ただで遊んで休息したら、売店で何か一つ位買って帰ってほしいですね。どこよりも安全でおいしいと自負して

いるんです」

口では「安全でおいしいもの」と言いながらも、安い外国肉で間に合わせる消費者の一面を見る思いがした。

**「おいしい風、ゆたかな時間、ふるさとの命をあなたに」**

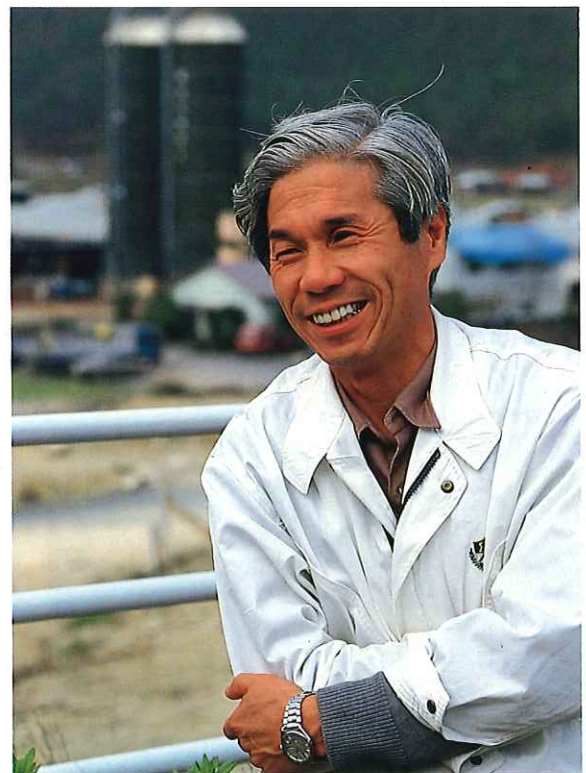
坂本場長には次の計画がある。今までも「米を食べ牛を飼え」と言いながら、農家の育成や農業で食べていく道をさまざまなかたちで模索してきたが、かつてはあり余っていたワラも減反や農家の高齢化などで、いまでは貴重な存在だ。

地域や県下の農家が元気でないと豊かな自然環境も失われていく。坂本場長は「農作業も手伝ってやりたい、おじいさんの作った野菜も売れるようにしてやりたい」と語る。

そのためには流通システムの開発や、組合員を増やして顔の見える直売方法を拡大していくことが必要だ。

一方、船方総合農場の周辺には、地元農家と協力して野菜や花卉の施設ハウスをつくり、独自の複合農業を手がけていく計画が進められている。バイオによる優良品種の開発、育成棟も予定されており、新しい農業経営のオピニオンリーダーとしての役割も果たしていくことになりそうだ。

「おいしい風、ゆたかな時間、ふるさ



21世紀の夢を語る坂本場長

との命をあなたに」が坂本場長の21世紀への農業構想である。直接生産や販売には関係ないが、一昨年の台風で荒れた裏山のスギ林に、「ブナやナラ、モミジ等の落葉樹を育て、牧場の一角には小川や池も設けたい」と思っている。

これらの計画を実現するには、予算が大きく一企業力だけではふりだと思ふのだが、それに賛同する社員や組合員、地域の人たちがいろいろなかたちで参加、協力していくことが坂本場長の一番のねらいではないかと思われる。(文/浅井登美子・写真/藤田良雄)

●船方総合農場/みるくたうん

山口県阿東町徳佐14500-39

☎08395(6)0552



みるくたうんの売店





地域みんなが高齢者を支えあつて

福祉活動専門員たち

もう間近になった「5人に1人が高齢者」の時代。地方では65歳以上の高齢者が30%を超えた町村もあり、また山間部ではほとんどが高齢者というところもある。

お年寄りをどう地域に住む人々が支えていくかが地方の自治体にとつ

て重要なテーマ。老人保健福祉計画の策定が平成5年度から各自治体に義務づけられて、社会福祉は本格的な地方の時代に入った。

ここでは、町の社会福祉協議会で活躍している二人の福祉活動専門員の女性を紹介しよう。



上/老人ホームへ出かけオムツたたみをする西仙北町のお年寄りと佐藤さん(中央)。下/瑞穂町。障害者と児童の交流体験教室を指導する日高さん。

ひとりの不幸も見逃さない  
佐藤晴子さん(秋田県西仙北町)

秋田県のほぼ中央に位置している西仙北町は人口約1万2000人。奥羽本線刈和野駅で下車して少し行くと、人通りもまばらな商店街があり、その入口に「ひとりの不幸も見逃さない」という横断幕が道幅いっぱい張り渡されていた。

「ええ、私たちは本当にひとりの不幸も見逃してはならないという決意で昭和58年から見守りネットワークづくりをはじめたんですが、そのキッカケになったのは二人のおばあちゃんの死なんです。お二人とも独りぐらしてシヤンシャンしてらしたのにボケて、誰

『ふれ電お茶会』  
(西仙北町)



も知らないうちに路上で冷たくなって……」

つい昨日のことにように話す佐藤晴子さん(42歳)の目に涙があった。年齢よりずっと若く見えるしなやかな秋田美人だが、「私、キカナイんです」と言う。高校卒業後上京して大手建設会社に入社。一年ほどして人事部長が見合の話をもってきたと知ると、父は「ムコ取り娘なのにとんでもないことだ」と、ハハキトクの電報で呼び戻した。「やりはじめたことは最後までやれ」が口癖で、娘という意識なしに何でも

対等に話す父親であったが、跡取り娘」という一線だけは強要した。帰郷後役場に入って、二年後に社協へ移った。「ムコは取らなかつたが結婚した」。

二人の老女の死をキッカケに「毎日の暮らしの場での見守りがなければならぬ」と気づいた晴子さんは、持ち前のキカン気を發揮してネットワークづくりに専念した。民生委員総務で社協副会長でもある深浦次郎さんがよき理解者であった。

昭和56年・57年にわたって町内の上ノ台地区(149戸)をネットワーク活動推進地区に指定、晴子さんが下働き役をつとめて、そもそも社会福祉協議会とは何ぞや、ネットワークとは何ぞやと、原点から問い直す懇談会を重ねた。この地区は「新開地」と呼ばれていてサラリーマン世帯が多く、隣り近所の付き合いが薄い所だったが、話し合いの中から「一緒にやって気づいていこうや」ということになった。

町内地図上に福祉対象世帯を色分けする福祉マップをつくった。「いますぐ見てあげねばならぬ人がいるでねえか」と、町内会長が中心になってあるお年寄りをそっと見守っていくネットワークを組んだ。

72歳、独り暮らしのその女性は「地主の娘」というプライドが高くて民生委員もヘルパーも玄関払いされていたが、毎日さりげなく雪かきをしてあげ

るネット員の汗がお年寄りの心をほぐして、地域の人びととの交流がはじまった。見守りネットワークは全町に広がった。

●お隣のネットで24時間支援

現在西仙北町には次のような組織やグループがあり、高齢者たちを支えている。

- ・自治会組織(町内会、婦人会、老人クラブ)
  - ・ネットマン「たろっぺ」(医師・看護婦の会)
  - ・四ツ葉ひとり独り老人の会
  - ・かたつむりの会他、地域のボランティアグループ
  - ・お隣りネットワーク
  - ・高校生家庭クラブ科との交流、など。
- 町では晴子さんの働きかけで「ふれあい安心電話」を30人の希望する独り暮らしの家に設置した。設置するの間もなく利用者の家に協力員や、民生委員、社協の人たちが集まり「ふれ電お茶会」を行う。
- 電話にふれると緊急時を希望する人に告げられる上に、相手からも「風呂に入ったかや」といった具合に声をかけられる。この電話を、「ひとりでもさみしいよオ」と大らかに気がねなく話せるように活用してほしいというのが晴子さんの願いだ。

●「福寿園」へボランティアに

特別養護老人ホームには西仙北町から8名が入所しているが、何か役に立ちたいと、ボランティアグループが毎日のように交替で出かけ、オムツたのみ、食事の介助、話し相手などしている。「乙越あやめ会」「もみじ会」「白梅会」「かたつむりの会」など沢山のボランティアグループができた。在宅介護を助けようと、介護の実習も行っている。

昨年3月には、福寿園からの一日里がえりを開催した。

「おかえり、待ってたんだよ」とみんながホームへの入居者を出迎え昼食会をして、町内を車で案内するというもの。

また、歩む友の会「かたつむり」では月3回刈和中学校セミナーハウスにお弁当持参で、障害を持つ人たちが集まり、アルミ罐のリサイクル作動や、健康体操、合唱などを楽しんで帰るといった活動を行っており、最近は一泊二日の旅行も実施している。

●高校生ワークキャンプ

晴子さんがとくに嬉しかったのは、一昨年から高校生とお年寄りが2日間を一緒に過ごす「高校生ワークキャンプ」が実現したことである。まずお年寄りの家へ出かけ掃除の手伝いで親し

「社協の全事業を貫くものは福祉教育だと思えますね。教育とは大きな米櫃から米を一粒ずつ他の容れものに移していくようなものだ。気が遠くなるようなことだが、確実に変わる——という言葉が私たちの信念です」

日高政恵さんが通信教育で地域福祉活動指導員の資格を取ったのは13年前である。そのときから、地域住民の福祉教育こそが社協の最も重要な仕事ととらえて、実践してきた。

その3つの柱は、

- ・学校教育における福祉教育

## 毎日の仕事が福祉教育です 日高政恵さん(島根県瑞穂町)

くしたあと、西仙北高校の宿泊研修室「清風林」にきて食事したりお喋りを楽しみ、一緒に就寝。参加したお年寄りは5世帯、女子高生は10人。

「大勢で食べる食事は楽しかった」とお年寄り、高校生たちは「たくさんのご感動を与えてくれてありがとう」と感想文を寄せている。

今後も高校生や中学生とのふれあい交流を続けていきたいと晴子さんは語っていた。

- ・広報・調査活動による福祉教育
- ・実践と体験による福祉教育である。

昭和54年から点訳と手話講習会をはじめた。熱心に参加する人の中から「肩書きや学歴より人望がある」「言いっぱなしではなくて実践力がある」など、ボランティア・リーダーになれるような人を「一本釣り」して育成に時間をかけてきた。その方法は、さまざまなレベルの福祉学習会、つどい、シンポジウムなどの例年開催、ボランティア団体ごとに国内外の視察研修を毎年実施、実践報告や意見発表の機会を多くつくる、独りぐらし老人のたすけあい活動の育成などである。



障害者の話を聞く福祉体験教室(右端が日高さん)



月2回、外国人の女性も参加して手話教室。

## 「たのしゅうに、おもしろうに」 給食サービス

一般にボランティア活動というと婦人会や老人クラブなどがかり出されることが多いが、日高さんは最初から組織をアテにしなかった。組織で動く「やらされている」と感じる人もいるからである。

いま、瑞穂町では独りぐらしと身体が不自由なお年寄り約80人に週2回の給食サービスを行っているが、つくる人も配達する人もすべてボランティア。調理は「ともしびの会」というお母さんチーム189人で、配食は「か

たらいの会」というお父さんチーム66人である。それぞれの人が、ボランティア活動の三大原則である自発性・継続性・無償性に徹して、いきいき活動している。仲間が仲間をひきよせてボランティア仲間がふえているわけだが、「ともしびの会」の会長である舟津淑さんは、いとも簡単に「たのしゅうに、おもしろうに(ボランティア)やりよると、みんな参加したいと思うようになりますよ」と言う。

69歳とは思えない若さは、主体的に「たのしゅうに、おもしろうに」生きる姿勢からきているのだろう。

「残った人生、自分でどういう風に最後を飾るか、自由に生きたいですもん」と言う。4年前夫に先立たれたとき、子どもがないので親戚の息子と養子縁組してその一家に舟津家所有のもの一切を譲って町営住宅に入った。そのさわやかな生き方も、ボランティア精神に支えられているようだ。

日高政恵さんがたゆみなく草の根。パワを掘りおこしてきた福祉教育は、教育委員会とも深く連動していて、毎年発行してきた小・中学生の福祉文集「ふれあい」は12集を数えている。平成3年からは、瑞穂の福祉の心を後世に伝えるために町民の福祉文集として町民各層や都市に住む町出身者の意見や願いを綴り、ふるさと愛意識を高めている(指田志恵子)

# 知恵で出来る



森林作業に従事する諸塚村「青年隊」

## ● 国は「出来ない」という

農水省が昨年6月に発表した「日本の食料、農業、農村対策に関する基本的方向」（いわゆる「21世紀を指した新農政」）では、中山間地域農業に対する「デカップリング」は期待に反して見送られた。

「デカップリング」とは「分離する」という意味であって、農業の生産と農家の所得を一応分離して考え、所得の少ない中山間地域の農家には一定の所得レベルに達するようにその不足分を国が補償する、という政策のこと

である。

中山間地域の農業は自然条件に恵まれぬ上に経済的立地条件が悪いので、平地農業にくらべてどうしても所得が低く、したがって継続が困難である。ところが中山間地域というのは水系の源であるから自然環境の保全という点でも重要であるし、また都市市民の休養地としても大切である。その地域で農業を守り、自然景観を保全しているのは中山間地域の農家の営みである。所得が低くて農業を継続しがたいならば、その不足分を国が補償するのは当然ではないか。それが「デカップリング政策」実施の理由であった。EC農政が数年前からこれを実施して以来、日本でも中山間地域、とくに過疎地域に対して「デカップリング」政策を実施してもらいたいという要望は、各地域の行政担当者や学者・評論家に広くあったから、今度の「新政策」に対する期待は大きかった。

それにもかかわらず、「新政策」はこの「デカップリング」に冷淡であった。日本では「出来ない」というのだ。その理由は、①まず、日本の現状では国民的合意が得られない。②農家個々に所得を補償するのはこれまでの行政になじまない。③補償対象として個々の農家をどのように指定するか、その方法が不鮮明である、などなど。

## ● デカップリングに 踏みきった過疎地の例

宮崎県の諸塚村は山林面積95パーセントの

純林村である。昭和35年に8000人あった人口が平成2年には3000人を割るにいたった「激疎」の村である。高齢者人口も23パーセントに達した。村には若者はいるが、林業だけでは所得が足りず、ここに定住し林業を続け得るには条件が欠ける。

平成2年、甲斐重勝村長が「諸塚村国土保全森林作業青年隊」というものを創った。林業に熱心で村に定住しようという意欲ある青年男女のなかから、毎年5名づつ希望者を厳選して「青年隊」を創る。彼らはチームを組んで、村有林や森林組合に委託された山仕事を請け負い、労働賃金を稼ぐ。しかしそれだけでは役場職員など地方公務員の年収にとっても及ばない。そこでその不足分を役場が補償しようという制度である。補償金は村の予算と森林組合の助成と村民の寄付金で賄われる。これに寄付する村民とは山林の（大）所有者のことである。将来は第三セクターをつくり、この基金で運営しようという計画である。

平成4年度で「青年隊」は10人となったが、ほとんどが20歳代の若者で、中には20歳の女性が一ひたり含まれている。「青年隊」の定年は50歳で、以後は一定の年金がつく。「青年隊」の仕事は造林、育林、間伐、素材搬出、道路整備、集落生活環境整備、農作業等で、これから10年間、毎年5名づつ「青年隊」を増員して行けば、10年後には50人となる。熱心な隊員が50人もおれば民有林の適正な管理ができ、諸塚村の山林環境は保全される。村は県内のみならず福岡、熊本両県の水源地でもあ

# 過疎地のデカップリングは自治体の

安達生恒 (島根大学名誉教授)

る。諸塚の山を守ることはそれらの流域生態系を保全することにつながる。青年隊に「国土保全」の名を冠したのもその故である。

平成3年度は青年隊10人で年間2119日出勤している。一人平均210日。立派なものである。その中には研修日も含まれている。研修には東北、四国にも出かけ、林業を勉強しながら各地の活動家と交流し、自分の人間性を磨いた。「青年隊」の林業は山林生態系に留意して皆伐と一斉造林を廃し、「複層林」仕立と択伐方式をとっている。

「青年隊」の仕事は8時間制で、役場公務員と同じ日数の有給休暇があり、かつ残業・扶養・家族手当をはじめ、労災・雇用・厚生年金・社会年金などの保証がある。「持続する農林業」の条件とは、所得が保証され、生態系循環を守り、かつ公務員並みの休みが取れるということだ。「青年隊」の仕組みは他に先駆けてその三条件を満たしている。これはまさに、林村が自らの必要と知恵で生み出した、日本型山村の「デカップリング」である。

## ● 過疎農村の場合

昨年夏、農業コンサルテーションで大分県宇目町に出かけた。この町も有数の過疎地であるが、企業的養鶏農家が10軒もあるほか花卉栽培農家も育っていた。しかし高齢化が進んで水田の耕作放棄が心配される。集落に入って調べてみたら、10年後には農家数が3分

の1に減るところ、奥まったところでは農家が4分の1しか残らない集落などがある。そのまま放置しておいたら、大事な水田が荒地となるだろう。奥部の水田が荒廃すると環境が荒れ、水の確保が不安になる。離農者や高齢農家が放置する水田を稲作田として持続させる方法はないのか。

多数の離農者が出そうな集落でも4、5戸の専業農家があつて、そこには中年の農民が働いている。その人たちと問答してみても次のことがかつた。数人で組を創って離農者の水田を耕作することは出来る。ただし条件があると云うのだ。その条件とは、①機械作業の時間賃金を慣行賃金より引き上げること。②水回りの仕事や雑草を刈り取ったり稗を抜く仕事は誰か他の人がやること、の2点だった。これさえ整えば、集落にある水田の10ヘクタールや20ヘクタールは俺たちで十分やれるというのだ。

過疎の村では一年や数か月というまとまった期間の労働契約に応じ得る労働力はないが、週に数日とか、一日に朝晩数時間なら可能という「小間切れ」労働は高齢者や婦人になりにたくさんある。この小間切れ労働力を組織して、少し高目の時間労賃を支払って上述の雑作業をやってもらう。

過疎債を元金にして第三セクターをつくる道が開かれた。この第三セクターが稲作の機械作業を請け負う生産者組織と、上記の雑作業を請け負う高齢者や婦人の組織をつくり、水田の受委託と賃金支払いの事務を行えばよ

いのだ。水田の所有者で自ら耕作出来ない者からも出資してもらえばさらによい。そういう私案を提供してもらってきた。これは諸塚村でやっている方式のいわば農業版である。水田の荒廃を防ぎ生産力を落とさず、かつ農村の環境を保全する方策として勧めたいと思うが、どうだろうか。

受委託面積を増やし、かつ機械作業の料金を上げることは専業農家の所得向上の補償につながるし、時間当たりの高めの賃金を高齢者や婦人に支払うことは彼らの収入をいくらかでも補償することになるだろう。そしてこういう仕組みが生まれれば、水田の荒廃は防げ、地域の環境は保全される。農地と環境を守るための第三セクターは町村の自力で創れるのだ。これこそ「日本のデカップリング」ではないのか。

そういうことを過疎町村が知恵を出し、各地各様、自分の地域に合ったスタイルで始めてみてはどうか。各地に広がれば世論は変わり、腰の重い農水省もやる気になるだろう。21世紀への展望は、まさに「地方からの時代」である。



# 小さな町村にナマの音楽を 37回目を迎えた「モービル・ライブ・サウンズ」



広島県作木村でのデューク・エイセスコンサート。地元の子供やママさんコーラスなども参加して。

最近では立派なホールやコンサート会場が都市部周辺に急激に増えてきた。そんなホールを目当てに、世界の一流アーティストたちが日本にもどんどんやってくるようになった。しかし、そうした恩恵を受けられるのは地理的に恵まれた地域に住む人々ばかり。そこで、大都市から遠く離れ、ホール施設のない町村の人々にも、もっとナマの音楽を楽しんでもらおうと、モービル石油が文化活動の一環として始めたのが「モービル・ライブ・サウンズ」だ。92年12月で37回目を迎えるという、その実績に大きな拍手を送りたい。

## 陽の当たらない分野に光を

モービル石油といえば、我々にとって馴染み深いのはやっぱりガソリンスタンドだ。そのモービルが、コンサート活動を行っているという。しかも、文化的に陽の当たらない地域ばかりを選んで、採算を全く度外視した、純粋な文化活動である。

企業の文化活動がここ数年日本でもブームになったが、その多くが文化活動に名を借りたビジネスであった。モービル石油はアメリカ系企業ということもあって、良き企業市民であることをモットーに、古くからユニ

ークな文化活動を行ってきた。

「良き企業市民」とは、企業も社会の一員であり、単に利潤追求だけでなく、地域のために利益の一部を還元しなければならぬ、という考え方だ。この考えはモービル石油が初めて日本に進出した明治26年以來、一貫して貫かれてきた企業姿勢といえるだろう。アメリカではこうした企業の社会還元は、常識に近いものとして定着しているという。

モービル石油の場合、社会・文化活動を行うにあたって、いつの頃からか生まれたのが、独自の三原則。①陽の当たらないところで、他社が援助していない分野を支援する。

②一度は始めたら継続する。③利益追求などの見返りを求めない。以上の三原則に、最近新たな一項目が追加された。それは、④活動は従業員や役員が必ず参画し、手づくりのプログラムを提供すること、というものだ。

これまでの活動の主なもの、1966年度から始まり、初山滋氏や椋鳩千氏など30名近い作家やタレント、個人や団体などがその賞を受賞している「モービル児童文化賞」をはじめ、小澤征爾氏他、山口五郎(尺八)ら洋楽・邦楽の音楽界の活動家を受賞している「モービル音楽賞」、そして1986年に始まった「モービル・ライブ・サウンズ」。他にも留学援助制度の各種プログラム「フルブライト・モービル・フェローシップ」(大学院留学)、コロンビア大学の大学院の協力を得た国際報道研究、「コロンビア・モービル・フェローシップ」、「新渡戸・モービル・フェローシップ」(社会科学国際フェローシップ)など、



「モービル・ライブ・サウンズ」のこれまでの公演

公演年月日	主演者・コンサート	公演町村
'86. 9. 19	ミュージカル「ファンタスティックス」	北海道河東郡上士幌町
'86. 10. 26	石井好子・青木裕史コンサート	千葉県山武郡蓮沼村
'86. 11. 23	デュークエイセス・コンサート	佐賀県東松浦郡七山村
'87. 3. 27	ミュージカル「ファンタスティックス」	静岡県周智郡春野町
'87. 6. 7	猪俣猛トリオ・タイムファイブ ジョイントコンサート	愛媛県上浮穴郡久万町
'87. 7. 25	デュークエイセス・コンサート	広島県双三郡作木村
'87. 9. 29	ボニージャックス・コンサート	兵庫県養父郡大屋町
'87. 10. 12	ボニージャックス・コンサート	新潟県西蒲原郡分水町
'87. 11. 11	ロス・インディオス・コンサート	福島県耶麻郡山都町
'88. 4. 4	猪俣猛トリオ・青木裕史・弘田三枝子ジョイントコンサート	鹿児島県始良郡牧園町
'88. 6. 3	ミュージカル「ファンタスティックス」	神奈川県足柄上郡山北町
'88. 7. 13	ボニージャックス・コンサート	北海道川上郡美瑛町
'88. 9. 27	芹洋子コンサート	岐阜県恵那郡明智町
'88. 10. 25	猪俣猛トリオ・金子晴美ジョイントコンサート	徳島県勝浦郡勝浦町
'88. 11. 29	ボニージャックス・コンサート	岡山県浅口郡寄島町
'89. 4. 4	ボニージャックス・コンサート	茨城県久慈郡里美町
'89. 5. 26	山形由美フルート・コンサート	滋賀県神守郡永源寺町
'89. 6. 19	さとう宗幸コンサート	山形県最上郡戸沢村
'89. 7. 19	デュークエイセス・コンサート	北海道羽志郡乙部町
'89. 9. 19	五十嵐喜芳・斉田正子コンサート	千葉県夷隅郡大多喜町
'89. 11. 20	五十嵐喜芳・斉田正子コンサート	宮崎県東諸県郡綾町
'90. 4. 26	五十嵐喜芳・五十嵐麻利江コンサート	高知県香美郡夜須町
'90. 5. 29	荘村清志・圓城三花・斉田正子コンサート	福井県丹生郡越前町
'90. 7. 16	團伊玖磨・花房晴美・金岡裕子コンサート	栃木県那須郡鹿頭町
'90. 9. 17	デュークエイセス・コンサート	岩手県東磐井郡東山町
'90. 10. 15	常森寿子・荘村清志コンサート	京都府加佐郡大江町
'90. 11. 7	岡村高生コンサート	山口県大津郡三隅町
'91. 4. 2	塚田京子コンサート	大分県東国東郡国見町
'91. 6. 11	荘村清志・斉田正子コンサート	愛知県南設楽郡作手村
'91. 7. 5	荘村清志・斉田正子コンサート	北海道斜里郡小清水町
'91. 9. 2	林康子・ジャンニコラ ビリウッチ ジョイントコンサート	香川県水田郡牟礼町
'91. 9. 30	ボニージャックス・コンサート	宮城県牡鹿郡牡鹿町
'91. 11. 18	五十嵐喜芳・斉田正子コンサート	奈良県吉野郡吉野町
'92. 4. 27	デュークエイセス・コンサート	群馬県多野郡鬼石町
'92. 5. 26	荘村清志・圓城三花・斉田正子コンサート	熊本県芦北郡津奈木町
'92. 7. 7	ボニージャックス・コンサート	青森県上北郡下田町
'92. 12. 2	ボニージャックス・コンサート	岐阜県下知地区

・モービル石油㈱広報部広報課／〒100 東京都千代田区大手町1-1-29サンケイビル新館 303(9)24(4)4495(直)

出演者や村への交渉もすべて社員の手で

「モービル・ライブ・サウンズ」がスタートしたのは今から7年前。モービル石油の文化活動の中ではまだ歴史は浅いが、これまでの公演回数は、すでに37回にも及んでいる。

その領域は多岐にわたっている。中でも「モービル・ライブ・サウンズ」は先に述べた4原則を、見事に象徴した活動として共感を集めている。

その37回にわたる公演の出演者リストを見ると、石井好子、デューク・エイセス、ボニージャックス、芹洋子、山形由美、五十嵐喜芳、林康子など、第一線で活躍中の一流の音楽家ばかりなのに驚く。

そして、これらの公演が行われたのは人口5,000〜1万人という町村がほとんどで、会場は公民館や体育館であることが多い。入場料はとらず、すべて無料。会場では宣伝物なども置かず一切の販促活動をしない。会社側からの挨拶などもせず、ただ、何かあった際に責任の所在を明らかにするために、コンサートのアマに社名を入れているのだという。

モービル石油の文化活動の4原則が、すみずみに互って活かされていることを実感する。

この「モービル・ライブ・サウンズ」の中心的な実行メンバーである本社広報部広報課の太田颯衣課長に話を訊いた。

「実際には、役場の窓口との交渉の段階で、余りにウマイ話だということ、逆に敬遠されてしまったことも何度かあります。日本では、企業の

社会還元という思想がまだまだ一般的には浸透していません。こちらの主旨を理解して

いただくのに苦労することも少なくありません。ですが、多くの場合、喜ばれ、窓口となる教育委員会などが、率先して切符を配ったりしてくださいます。そして出演者への交渉ですが、これもお忙しい第一線の方々へ、交通の便や、音響や照明などの設備の悪い会場への出演を依頼する訳ですが、皆さん、私どもの主旨を理解し快く承諾してください」

「役場との交渉から、出演者への依頼、スケジュール調整、会場の設定など、通常ならプロの代理店や興業プロダクションの行う仕事を、すべて太田課長らが現地に幾度となく足を運び、進めていく。表には一切出ることのないこうした陰の努力の積み重ねによって、「モービル・ライブ・サウンズ」は着実に回を重ね、人々の心を捉え続けてきた。

文化的に陽の当たることのなかった地域の人々にとって、一流の音楽家の演奏や歌声をナマで聴けるというのは、素晴らしい体験だ。「ところによっては涙を流して聴いてくださっているお年寄りもいると聞いています。ボニージャックスさんにお願ひした青森での公演の時も、会場はトタン屋根に床は座ぶとんを敷いたようなところでしたが、観客もボニーさんも本当に一体となって、それは感動的でした」と、新任の太田課長。

今後、クラシック、ポピュラー、ジャズ邦楽など、ジャンルに捉われないことなく、本物の音楽を、全国各地の人々に届けたいという。ナマの素晴らしい音楽を目のあたりにした小さな村の子供たちの中から、いつか未来の本物の音楽家が生まれてくるかも知れない。

# 「その先の日本へ」 JR東日本のポスターづくり

その先の日本へ。



つた。  
従来のイベントを中心としたポスターとはひと味違うタッチがあり、山形新幹線開通に併せてはじめたキャンペーンで、東北への旅をいざなう。

その頃出たもう一つのポスターに、山形新幹線沿線の住民を紹介するシリーズもあった。人とのふれあい、ふるさとの素朴なイメージを、ある地域の住民全員を登場させて紹介するというもの。70〜80人から多いところは200名が登場するだけにインパクトがあったが、お年寄りや中高年者が多く若い娘が少ない。はからずも、農村がかかえる過疎化、高齢化を訴える効果もあり、このあたりを制作者たちもしっかり意識していたと思われる。

いずれにしてもJRのポスターはあの手この手と実に上手く、コピーライターやカメラマンたちも無視できない存在だ。

JR東日本の広報課に、JR旅キャンペーンのねらい方、見せ方、さらに自治体がつくる観光パンフレット、要覧等についての感想を聞いてみた。

## 旅、ふるさと 心の部分に訴える

JR東日本本社というより国鉄本社と呼ぶのがふさわしい東京駅前にある重厚なビル。その二階に広報課がある。

広報課員はそれぞれ仕事の担当が違い、JRが行う事業や情報をマスコミ等に報道す

る係、事故等が発生した時の窓口になる係などがいて、広報課の隣には記者クラブ室もある。

ポスター等の実際の制作は、JRグループの各社や代理店、デザイン会社が当たることが多いが、全体のポリシー、イメージづくり、チェック、ゴーサインは営業部広報課が行う。

JR東日本制作の『その先の日本へ』キャンペーンを紹介してくれたのは小池裕明さん。国鉄時代の昭和57年に入社し、改札係として駅で働いた経験もある。

「昨年7月1日に山形新幹線が開通しましたので、東日本へ鉄道を使って行っていただきたいということから、まず山形駅長に出てもらいたいポスターをつくりました。

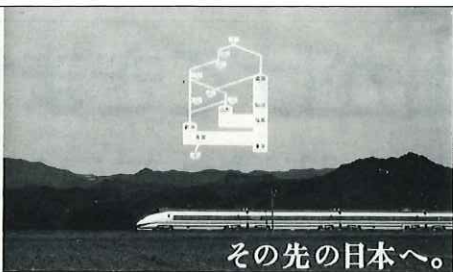
山形地区を含めた東北は広大な地区で、例えば京都、岡山、あるいはお茶の静岡というように即目玉になる観光地は少ない。そこでJRのサービスとラップさせて、ぬくもり、やさしさ、ホスピタルをオーバーラップさせようと『その先の日本へ』を考えました。

これは直接的に商品売るポスターではなく、どちらかというとイメージポスターです。何となくほのぼのして旅に行ってみたい、その土地の人の暖かさにふれてみたいと思ってくれればいいのです」

JRグループのポスターには、フルムーンとかジバンギ俱樂部などの割引き制度キャンペーンものの他に、各地の観光協会とタイアップしたイベントや行事ポスターがある。これらは、それぞれ工夫を凝らし、華やかさ、

人は、たまにのんびり列車に乗って旅に出たいと思っている。仕事やわずらわしい人間関係から開放され、好きな時パッと列車に乗り、見知らぬ場所へ行ってみたい。しかし、こんなセンチメンタルな願望を実現できるのはむしろ贅沢なことだということも、いまの日本人の多くは知っている。  
せめて、通勤の電車の中でJRの旅のポスターをながめながら、何時か自分を探す旅に出ようと思う。そんな人の心をとらえたのが『その先の日本へ』シリーズのポスターだ





その先の日本へ。

車内吊り用ポスター

自然や観光地の美しさに加えて、伝統工芸品や温泉地の具体的な紹介などを行っている。

それに比べると『その先の日本へ』は、地味でタイトルや文字もおとなしい。

「コピーや写真、デザインなどのテクニクでみせるものがふえています。私たちがこのポスターで心の部分に訴えたかった。何を感ずるとかとは十人十色でいいと思っていま

す。このポスターをみて、すぐJRの利用客が増えるとは思いませんが、一般企業が有料で行うのと違って、自社の媒体で行えるというのが強味、だから多少の遊びができます」

すっかり有名になった山形駅長に続き、最近では会津若松駅長が会津の宿場街を、また松本駅長が白銀の北アルプスの山々を背景に立つて、『その先の日本』を紹介している。

『その先の日本』というポスターもあり、こちらはローカル線の終着駅を紹介したものが、人影のない暗いトーンの写真だ。それについて小池さんは「普通こういうポスターを見た人からは、なぜこんな暗い写真を使うのかという声もありますが、デザインナーやプロカメラマンたちからは評判がいいんですよ。もちろんお客様からも。普段企業広告ではやりたくてもやれない部分なのでしょう。国鉄もJRになってずいぶん変わったという印象を与えるようです」と語る。

駅長さんというキャラクターが登場させたことは地方でもとくに好評のようだ。

「駅は地域の人々の接点です。クルマの旅もいいですが、駅に降りたつと、その地域の風土や人の生活ぶりが見えてきます。地域に住

## その先の日本へ。



駅舎に貼られるB全ポスター

む人、旅にきた人と土地の人、その交流の場として駅があり駅員がいると考えています」

昔の国鉄時代には少なかった地域交流とサービスの提供をJRは積極的にすすめている。制服も年々おしやれになり、とくに夏場の白い背広の上下は、一般企業や自治体も見習おうという話もあるほどだ。

### ◆ 普段着のふるさとを紹介する

自治体がつくる要覧や観光パンフレットも最近では、見た目にも美しく、美しく、おしやれでスマートなものが多くなった。モデルの女の子などが登場して観光地を紹介しているものも多く、制作は外注というスタイルも一般化している。

しかし一方で、その町村の普段着の部分が覚えてこない。都市住民が地方に求めるものは、必ずしも美しい自然や史跡、景勝地ではなく、ごく普通の暮らしの部分であることが多いと思うのだが…。

それについて小池さんは、「これは私の個人的意見ですから」と断りを入れながら語った。「広報宣伝物というものは、テクニクを使えば何でもないものがきれいにもなるし、特別なものにも見せることができます。若いきれいな女の子が登場すれば、じゃあ行ってみようと思ってくれる人もいて、それはそれで成功だとは思いますが、単発的になりやすい。

長いサイクルで考えていくなら、東京の人が地方へ行って本当に感動するものは何かをもう少し考え直してみることだと思います。観光地をツアーでぞろぞろ歩くという観光や、施設が豪華ならいいというテーマパークのかたちはもう倦まられています。

昨年夏、東北でJR東日本が主催して椎名誠の『村の学校』を開設しましたが、星を見る、林を歩くといったことが子供にも親にも人気を呼びました。

身のまわりの、自然のすばらしさや人情の豊かさについて、当事者は意外とわかりにくいのかも知れませんが、これからはどこにもあるようなパンフレットではなく、個性的なその土地ならではのものを、そして心に訴えていく方法も大切だと思います」

『その先の日本へ』は、もつと先きにあるであろう夢、未来への指標でもあるような気がする。

# （出かけてきませんか！） ひと味違ったユニーク施設

地球の上のさまざまな自然環境を五感を通じて体験してもらおうと平成3年10月にオープンしたものの。テーマゾーンの、①熱帯雨林（ジャングル）②恐竜の海 ③砂漠 ④マグマの海 ⑤氷河 ⑥大気圏 ⑦海洋底 ⑧宇宙の8つで、迫力ある効果音、湿度百パーセントや氷点下20度など、気象環境も再現されて臨場感を盛りあげている。

穂別町は「森と化石とロマンの



## リアルな疑似体験を 「穂別地球体験館」 (北海道穂別町)

里」づくりを進めており、地球体験館はその一環としての施設。企画・監修には、NHK「地球大紀行」の制作に携った東海大学坂田教授らが当たっている。

なお穂別町には、化石を中心とした町立博物館もあり、町内で出土した一億年前の海の生物の化石などが展示してある。●地球体験館 ☎01454-1512341 ●町立博物館 ☎01454-1513141

## 町営アイスアリーナ開設（北海道清水町）

昭和7年からアイスホッケーが行われ、「アイスホッケーのまち」をPRしてきた清水町では御影地区に町営アイスアリーナを開設した。総事業費7億7000万円、1745㎡のリンクで、町営では全国でも珍しい。アイスホッケーを全町的な競技として育てていくと共に、公式戦の開催や各チームの合宿練習に役立てていく。3月には日本リーグ戦が行われた。☎01566-313939



アイスアリーナの内部

見る、打つ、食べる

## 体験型そば博物館（長野県戸隠村）

戸隠そばといえば平安時代に起源を持ち、そばのルーツ的存在。村の貴重な財産である戸隠そばを再認識し、そば打ちの伝統技術やおいしい味を知ってもらおうと、村営の「戸隠そば博物館」が昨年オープンした。「見る・打つ・食べる」をキャッチフレーズに、呼びものは、そば打ち体験学習ができること。一日2回、村内のそば打ち名人が、地元産のそば粉を使ってそばの打ち方やその心を指導してくれる。地粉を使って素早く打ち上げ、井戸水で洗い冷やしたそばはすこぶるおいしい。

問い合わせ／戸隠村農政課 ☎0262-5413773



## 星と緑のロマントピア 「小川天文台」(長野県小川村)

海拔520m、北アルプス連峰を眺望する小川村は「星と緑のロマントピア」をふるさと創生事業にかかげ、平成3年4月にその中核として日本で唯一村営による小川天文台をオープンした。

天文台は直径7m、高さ9.3mの開閉式ドームだが、60cmの反射望遠鏡赤道儀があり、15〜16等星まで観察できる。天体画像処理装置



と組み合わせると20等星までの観察が可能で、専門家からも注目されている。

隣接してプラネタリウム館も開設され、こちらは最新レーザー機器と音響を使い、ファンタジックな宇宙ロマンが楽しめる。7月からは「銀河鉄道の夜」も上映される。

宿泊にはアルプス連峰と星夜を一望する「星と緑のロマン館」と「星のコテージ」もある。

●小川天文台 ☎0262-6913960 ●星と緑のロマン館 ☎0262-6913789

地球の息吹きを伝える

「断層地下観察館」(岐阜県根尾村)

明治24年、根尾村を震源地として発生した濃尾地震はマグニチュード8.0、内陸の地震としては日本最大級のもので、岐阜、愛知県を中心に約7000人の死者を出す大災害となった。この地震で根尾村水鳥地区には上下最大6m、水平3mの大断層が出現した。

この断層は国の天然記念物に指定されると共に、地震学者らの研究対象として注目を集めている。

同村では地震から100年を迎えた平成3年、文化庁や関係学会と相談して施設として整備することに、4年3月19日に「断層地下観



察館」としてオープンした。断層や地中の様子がよくわかり、生きものとしての地球の息吹きが感じられるようだ。

平成5年3月には併設して資料館もオープン。200インチのビデオカメラも設置され、光と音で地震のすさまじさを体験できる工夫もされている。

☎0581-3813560

自然とロマンの広場

「にしきメルヘンランド」(山口県錦町)

夢と童話の世界を豊かな自然の中で味わってもらおうと約3億円の事業費を投じて建設をすすめてきた錦町の「にしきメルヘンラン

ド」が今年3月末に完成、オープンする。

約1万7500㎡の敷地内には、木工加工体験ができる「ピノキオの家」、童話の人物が多数登場する「三匹のこぶたの家」「花咲かじいさんと桜の広場」「うさぎとカメの遊歩道」「シンデレラのお城広

神楽の復元と公演

「神楽館」「神楽殿」(熊本県波野村)

けにより、完全復元公演や文化協会の発足となり、昨年春には「神楽館」を開設した。

神楽館には日本各地の神楽の紹介や模型による神楽の知識(歌舞い)等が展示されている。また、茨神社に隣接して建設された「神楽殿」は神楽を上映するための施設で、現在毎月第一日曜日午後二時間公演されている。別途に団体等の予約公演も受け付け中。

●連絡先/波野村役場企画課 ☎0967-2412001



波野村中江には、江戸時代から伝わる岩戸神楽二十三座があり、国の重要文化財に指定されている。しかし中江はわずか28戸の小集落で神楽保存も危機に見舞われていた。この神楽に注目した熊本県立劇場鈴木健二館長の呼びか







海外の田舎暮らし訪問

# ユトランドの緑の風に吹かれて

デンマーク・ギネラップ村 ベストゴーさん一家



アンデルセンが生れ育った国デンマークはヨーロッパの北の端にある小さな国です。国土は日本の九州位で、人口は約510万人。  
農村の生活が見たくて首都コペンハーゲンからストアヘルト海峡を渡ってアンデルセンの生まれ故郷オーテッセンを見学、さらに北上してユトランド半島の北海岸に近いギネラップ村を訪ねてみました。

見渡す限りの大草原地帯には、いつも強めの緑の風が吹いていて、その向うは地平線。

日本の農村とは風土も暮らしもずいぶん違うようにみえますが、納屋の農機具、庭先きの草花や野菜には日本と同じようなものもあり、農業への愛も世界共通のようです。

(写真・文／小林恵)



中央ユトランドのシンケポーを発ち、DS B(デンマーク国鉄)を乗り継いで約3時間、ユトランド半島西北部のフーロップという駅に降り立ちました。

デンマークは沢山の島で成り立っています。が、電車は車両を切り離してそのままフェリーに乗せるので、島を渡るとい感じがしません。乗客も列車もそのまま乗せて走るといふ凄まじいフェリーです。

フーロップ駅で迎えてくれたのはアイメー・ベストゴー氏(56)。この村の図書館長を務めており、住いは隣村のギネラップ村だ。彼の車でギネラップ村へ向かいました。このあたりは、ほぼ人口3000人位。人口と面積の割合は北海道あたりと似ています。

ベストゴー氏の家が見えてきました。近くとポールにデンマークの国旗がはためいています。国旗は定められた祝日にするというより、最大の歓迎の意を表して掲げるそう。家族そろって我々を待っていてくれました。

ベストゴー氏の家族はグリ夫人(51)と二人の娘さん、ステイネ(21)とマリエ(16)。グリ夫人は家庭菜園と家事をし、ステイネは自転車で約20分の隣町へ勤めに出ており、マリエは高校生です。

ベストゴー氏一家はここに18年前に移り住んできました。元厩舎だったという家を好みに内装しなおしたそうで、それが自慢の一つです。牛2頭を共同牧場で飼育し、大麦、小麦も自家用として作っています。

家は一階に農機具や自転車などを収納する納屋とベストゴー氏の書斎、台所と居間、夫



妻の寝室。二階が姉妹の個室で、それほど広くはありませんが、どの家もご主人が小さいながらも書斎を持っているようです。車も一家に一台、あとは自転車を活用しています。

決して贅沢なものを飾ったり家具調度品にお金をかけているわけではありませんが、室内装飾のセンスが大変よく、色彩感覚の豊かさには驚かされます。絵画やレリーフ、野の花、照明などを巧みに用いて個性的でアットホームな雰囲気を作っています。

食事もそれほど贅沢ではありませんが、パンやケーキ、クッキーを焼いて客をもてなします。最近では村へもパンやチーズを売る車がまわってくるため、全部を手作りにはせず、市販のものも上手に活用しています。

翌日曜日には村の教会へ礼拝に。私たちが訪れた日は350人が集まり、教会堂は一杯に

なりました。熱心なキリスト教徒の国ですが、それでも毎週礼拝に出席するのは20人に一人以下といわれています。日本に比べて子供たちの姿が多いのは意外でした。「若い人はみな都市へ出たがるの?」と聞くと「いいえ、できればこの村や両親の近くで暮らすことが一番です」と姉妹は即答。

親日家であるベストゴー氏の娘さんは日本の経済成長には相当関心をもっていて、今年には神奈川で伝道している氏の友人を訪ねる予定とか。

デンマークはスエーデンと並んで高度福祉国家ですが、税負担が高く、日本の消費税に当たるものは25%。安心してゆとりを持って暮らせる反面、バイタリティを奪っている面もあるようです。

日没が午後10時ということで、話し込んですっかり寝不足になった我々でしたが、翌日家を一步出ると、どこまでも続く緑の草原と青い空に心身が洗われる重いでした。村内を車で走ってみました。どこも美しく清潔です。海から吹いてくるコトランド特有の強い風が時々ビュービューとうなり響きます。

牧場には風を利用した自家用風力発電があり、牧場の棚の電流や牛舎の暖房などに使っています。大規模な風車発電所もあり、地域住民の大切なエネルギーになっています。





ベストゴーさん一家。左がマリエ、右がスティネ。



針さしや糸まきも室内装飾に一役買っている。



農機具の収納もセンスがいい。

▼ 共同の放牧場。自家用の風力発電がある。



宝くじ楽園へようこそ。  
パラダイス



本誌は、財団法人日本宝くじ協会の助成を受けて作成したものです。

